



Title	デンマーク語における名詞の既知形を先行詞とする制限的關係節について
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1996, 12, p. 105-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語における名詞の既知形を 先行詞とする制限的關係節について

新谷俊裕

1. 序

關係節は従来、以下のように分類されてきた。(本稿で示す例文中のコンマは、原則として、すべて“文法的コンマ法”(grammatisk komma)による。)

(A-i) 制限的關係節：“不定”の先行詞¹⁾

(1) Han bor i en ejendom, der har fem etager.²⁾

〈彼は5階建てのアパートに住んでいる。〉

(2) På fem minutter løste hun et problem, som jeg havde kæmpet med i to timer.

〈5分で彼女は、私が2時間苦しんだ問題を解いた。〉

(A-ii) 制限的關係節：“定”の先行詞

(3) Den ejendom, som han bor i, har fem etager.

〈彼が住んでいるアパートは5階建てだ。〉

(4) Den å, som løber gennem Randers, er Gudenå.

〈Randersを流れている川はGudenåだ。〉

(B-i) 非制限的關係節：“不定”の先行詞

(5) Jeg foretrækker en cykel, der ikke forurener, fremfor en bil.

〈私は、自転車は汚染を起こさないので、車よりもいいと思う。〉

(6) Så fik jeg en papegøje, som senere viste sig at være en undulat.

〈そこで僕はオウムをもらったが、それは後でインコであることがわかった。〉

(B-ii) 非制限的關係節：“定”の先行詞

(7) Sygehuset, der begyndte den ny type prøver for et halvt år siden, ser mange fordele ved at skifte. (WA'86)

〈(その)病院は、半年前にその新種の検査を始めたが、新しい検査に換えると好都合なことが沢山あると言っている。〉

(8) Han gav brevet til kontoristen, som så skrev det av.

〈彼は手紙を書記に渡し、書記はそれを写した。〉

(例文(8)は、訳も含めてイエスベルセン(1958:130))

本誌Ⅷ号(1988年)の拙稿「デンマーク語の關係節と先行詞の限定方法について」

の中で、以下のような関係節を含む例文 (9), (10) について考察した。

(9) Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt.

(10) Syrenen, vi plantede i foråret, er gået ud.

(9), (10) の関係節は、その先行詞が定冠詞によって限定されている — この場合は既知形になっており、後置定冠詞によって限定されていると考える — ことから、非制限的關係節であると考えられる (イエスベルセン 1958: 129ff.; Diderichsen 1976: 212; Lomholt 1982: 69)。

一方、先行詞の後に関係代名詞 *som* が省略されていると考えられるが、この *som* の省略が可能なのは、関係節が制限的關係節であり、*som* が関係節中の目的語である場合である (Mikkelsen 1975 (1911): 719f.)。

つまり、(9), (10) の関係節は非制限的關係節であり、かつ制限的關係節でもあるという矛盾した結論に到達する。この矛盾を解決するために、本誌Ⅷ号の拙稿では、英語の關係節に関する中島 (1980: 25ff.) の分類法をデンマーク語の關係節に適用する試みを行なった。

非制限的關係節に関しては、中島の分類法は従来のもので変わるところはないが、制限的關係節に関しては、従来、先行詞が“不定”か“定”かによって2分してきたものを、中島は先行詞の分類に関して、“新情報”、“既知”という情報・意味上の分類と“後方照応的”という文法機能上の分類の2つの基準を導入することにより、従来の制限的關係節を3分している。これを筆者は先行詞を文法上の形態という1つの分類法により修正し、その結果、關係節を全体で以下のように分類した (右端のカッコ内の数字は上で示した例文の番号を示す)。

(a) 必要關係節

- (i) 記述的關係節：不定の先行詞 (1), (2)
- (ii) 記述的關係節：前方照応/外部照応的先行詞³⁾ (9), (10)
- (iii) 制限的關係節：後方照応的先行詞⁴⁾ (3), (4)

(b) 付加的關係節

(1) 挿入的關係節

- (i) 記述的關係節：不定の先行詞 (5)
- (ii) 記述的關係節：前方照応/外部照応的先行詞 (7)

(2) 連続的關係節

- (i) 記述的關係節：不定の先行詞 (6)
- (ii) 記述的關係節：前方照応/外部照応的先行詞 (8)

つまり、(9), (10) は (a-ii) に分類される。(9) の *pengene* や (10) の *syrenen*

は前方照応/外部照応的先行詞であり、それらを修飾する関係節は記述的關係節ではあるが、付加的關係節（(b-1-ii), (b-2-ii)）の場合とは異なり、文の構成上不可欠な必要關係節ということになり、その意味は下のようになる。

- (9) <彼がその時もらった例の（/その/あの）お金は、彼はもう使ってしまった.>
(10) <我々が春に植えた例の（/その/あの）ライラックは枯れてしまった.>

以上のような主旨のことを本誌Ⅷ号の拙稿で示したわけであるが、その後、1993年の秋に Dansk Sprognævn（デンマーク国立国語研究所）の上級研究員である Henrik Galberg Jacobsen 氏にお会いした際に、氏が本誌Ⅷ号の拙稿に対して短く言及し、上で見たように必要關係節を3つに分類するのは無理であろうと言われた。また、氏は後に、英語の影響でデンマーク語に起こった（とされる）言語変化に関する論文の中で、制限的關係節で先行詞が指示代名詞によって限定される代わりに後置定冠詞により限定される場合があるが、これは必ずしも英語の影響であるとは言えないであろうという主旨のことを書いている（1994: 17）。つまり、この記述から、制限的關係節で先行詞が後置定冠詞によって限定されているタイプのもは中心的用法、つまり主流であるとは言えないが、確実に存在するということが読み取れる。その後、筆者も、後置定冠詞により限定された先行詞を持つ關係節で、どうしても制限的關係節としか解釈できない例文を目にするにつれて、上記（a-ii）のタイプは存在せず、(9)、(10)では先行詞を限定している後置定冠詞の機能が前方照応的あるいは外部照応的という本来的機能からは逸脱しているが、それでも（a-iii）の“制限的關係節：後方照応的先行詞”に分類されるべきであると考えようになった。これにより、本誌Ⅷ号の拙稿で試みた關係節の新分類法そのものが無効であり、結局は従来の分類法しかないということを確認するにいたった。本稿ではこの点について少し触れてみる。

また、2年前の本誌11号の拙稿で、デンマーク語のコンマ法のうち“文法的コンマ法”（grammatisk komma）を外国人たる我々は学ぶべき点を強調したが、それに関連して、Dansk Sprognævn では、Galberg Jacobsen を中心として、現行の“文法的コンマ法”と“ポーズ（息継ぎ）のコンマ法”（pausekomma）との中間にある“統一コンマ法”（enhedskomma）を将来導入する動きがある点にも触れた。その“統一コンマ法”が“新コンマ法”（nyt komma）という名のもとに、今まさに導入されようとしている。正書法辞典の新版（*Retskrivningsordbogen*, 2. udgave, 1996）がこの秋にも出る（本誌12号の発行よりも前の可能性が高い）が、その中で、“ポーズのコンマ法”が廃止され、“新コンマ法”が導入されるという。それに先立ち、Galberg Jacobsen (1996) は“新コンマ法”を説明しているが、それによると“新コンマ法”の大きな特徴は、従位節の前には — 文頭ではもちろんのこと — ふつうはコンマを打たない

が、従位節が挿入的な場合にはコンマを打つということである。ここで特に問題になりそうなのは、関係節が挿入的、すなわち非制限的かどうかを見極めることである。ここで、まさに上記の例文(9)、(10)に類似のタイプの関係節 — som を省略していない(9a)、(10a)のタイプの関係節 — の見極めが問題になりそうである。(9a)、(10a)は“文法的コンマ法”によると、次のようになる。

(9a) Pengene, som han dengang fik, har han allerede brugt.

(10a) Syrenen, som vi plantede i foråret, er gået ud.

一方、これらは“新コンマ法”では次の2通りになる可能性がある。

(9a-1) Pengene som han dengang fik, har han allerede brugt.

(10a-1) Syrenen som vi plantede i foråret, er gået ud.

(9a-2) Pengene, som han dengang fik, har han allerede brugt.

(10a-2) Syrenen, som vi plantede i foråret, er gået ud.

つまり、“文法的コンマ法”による(9a)、(10a)は制限的關係節の可能性もあるし(“新コンマ法”による(9a-1)、(10a-1)に相当)、非制限的關係節の可能性もある(“新コンマ法”による(9a-2)、(10a-2)に相当)からである。本稿ではこの点にも触れてみる。

2. 先行詞が名詞の既知形である — すなわち後置定冠詞により限定されている — 制限的關係節の存在の有無

Galberg Jacobsen (1994) は、ここ20~30年間にデンマーク語に起こってきた変化で、英語の影響ではないかとされている変化を検討し、考察しているが、その中で、先行詞が名詞の既知形である — すなわち後置定冠詞により限定されている — 制限的關係節(以下ではこれを〔名詞既知形+制限的關係節〕で表す)についても扱っている(Galberg Jacobsen 1994: 17)。Galberg Jacobsen によると、Pedersen (1988)⁵⁾ は Den mand der står derovre er min bror. <向こうに立っている男は私の兄です。>の代わりに Manden der står derovre er min bror. が用いられるというように、〔後置定冠詞に限定された名詞 [= 名詞既知形] + 制限的關係節〕の使用の頻度が高まってきたのは英語の影響であるとする。それに対して Galberg Jacobsen は、これは英語をデンマーク語に翻訳したテキストでは大いに当てはまる可能性はあるが、この変化がそれ以外の — 英語とは無関係に書かれた — 純粋にデンマーク語のテキストでどのくらい起こってきているのか現在のところ不明であるので何とも言えないと疑問視している。ちなみに、Pedersen が〔名詞既知形+制限的關係節〕の発生そのものが英語の影響によるとしているかどうかということは、Galberg Jacobsen の解説には明記されていないが、Pedersen の “øget frekvens” <使用の頻度が高まってきた>という表現から、どうやら〔名詞既知形+制限的關係節〕の発生そのものは

デンマーク語内部で起こったと見ているようである。

Galberg Jacobsen (1996: 25) は“新コンマ法”を説明した中の“非挿入節”を扱った箇所では、「関係節が挿入的か非挿入的かを判断するのが困難な場合がある」として、*Syreneerne(,) som vi plantede i foråret, er gået ud.* 〈我々が春に植えたライラックは枯れてしまった ↔ それらのライラックは、我々が春に植えたものだが、枯れてしまった。〉という2つの解釈が可能な例を挙げている。このことは、今年(1996年)の秋に出版予定の正書法辞典の第2版にも載るであろう。

すなわち、Galberg Jacobsen (1994: 17) から、〔名詞既知形+制限的關係節〕が確実に存在することがわかった — その存在の有無を記述から確認できる — わけであるし、その使用が未だ周辺的であることもわかる。また、Galberg Jacobsen (1996: 25) から、〔名詞既知形+制限的關係節〕の存在が正書法辞典に明記される(であろう)こともわかった。

3. 〔名詞既知形+制限的關係節〕の頻度

〔名詞既知形+制限的關係節〕の使用が周辺的であるという点に関しては、筆者自身も少し調べてみた。⁶⁾ 先行詞が“定”のもので、文脈から確実に制限的關係節であると判断できる關係節の総数中に占める〔名詞既知形+制限的關係節〕の数を調べてみた。下の数値がそれであるが、斜線の左側が〔名詞既知形+制限的關係節〕の数、斜線の右側が先行詞が“定”の制限的關係節の総数である。また、先行詞が“定”の制限的關係節の例のうち、〔名詞既知形+制限的關係節〕以外のものはすべて〔指示代名詞+名詞未知形〕である。

LD= <i>Lær dansk</i> (1969):	1/3	
MF1= <i>Myrens Fortællinger 1</i> (1987):	1/8	
MF2= <i>Myrens Fortællinger 2</i> (1987):	2/29	
MF3= <i>Myrens Fortællinger 3</i> (1989):	3/20	(MF1-3 小計: 6/57)
FJ= <i>Familien Jensen</i> (1989):	0/50	
PS= <i>På sporet</i> (1994):	6/18	
WA= <i>Weekendavisen</i> (1996):	3/64	
	(合計: 16/192	→ 全体の8.3%)

LD は全28課からなる初級の教科書である。FJ は本学2年生の教科書であったが、昨年度から PS に替えた。FJ は全14課からなる中級者用テキストであるが、最後の第14課は同教科書の筆者 Planck 自身の手によるのではなく、さまざまな新聞記事の寄せ集めであるので、第14課は今回の調査対象から外した。PS は、prolog, 全23課、

epilog からなる中級者用テキストである。MF は外国人のデンマーク語学習者のために、19名のデンマークの作家たちが書き下ろした（3編の詩を含む）短編集であり、少しでも大勢の人の傾向を見るためには格好の材料と言えようか。WA は週刊新聞の1996年5月24日－30日付けの海外版の本冊で、全部で12頁あり、執筆者は20名以上である（これに「読者からの手紙」の書き手も加わる）ので、これも少しでも大勢の人の傾向を見るために役立つであろうと思われる。

調査対象が非常に限られた、ごく僅かなものにすぎないので、断言できないのは言うまでもないが、〔名詞既知形＋制限的關係節〕の例が上記で示す低い数値、ならびにその頻度数の8.3%という低い数値から、〔名詞既知形＋制限的關係節〕は Galberg Jacobsen (1994: 17) が示唆した通り、非常に周地的であると言えそうである。

ところで、LD に次のような〔名詞既知形＋制限的關係節〕の例が1つだけある。

(11) Tidligt hver morgen kommer avisen, som han abonnerer på. (LD: 59)

〈毎朝早くに、彼が購読している新聞が来ます。〉

(11) の som han abonnerer på は、前後関係から判断して間違いなく制限的關係節である。したがって、その先行詞は avisen とするよりは〔指示代名詞＋名詞〕として、den avis とする方がよい、というのが Dansk Sprognavn の Erik Hansen や Henrik Galberg Jacobsen の意見であると聞いているし、⁷⁾ 筆者の同僚の客員教授 Martin Paludan-Müller 氏の意見でもある。つまり、〔名詞既知形＋制限的關係節〕は周地的現象であり、制限的關係節の中心的な構造、すなわち主流ではないから、用いない方がよいということが言えようか。

4. 諸文法書は〔名詞既知形＋制限的關係節〕をどう扱っているか？

§ 2 と § 3 を踏まえて、以下では、これまでの文法書が〔名詞既知形＋制限的關係節〕をどのように扱ってきたのか整理してみよう。

4.1. 〔名詞既知形＋制限的關係節〕の存在はもとより、〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕と〔名詞既知形＋非制限的關係節〕との違いにも言及していない文法書関係節とその先行詞の限定方法に関する記述では、Diderichsen (1982), Jones & Gade (1985), Planck (1982) という外国人学習者用のデンマーク語文法書は先行詞の限定方法に関していっさい触れていない。

同様に Gjesing (1991: 48) も先行詞の限定方法に関してはいっさい触れていないが、彼女が示している関係節の例文ではすべての先行詞が名詞の既知形となっている。半ページあまりというごく限られたスペースの中で関係節の説明をしているとはいえ、これでは、外国人が作る制限的關係節を含んだ文がすべて、中心的ではなく周地的にすぎない〔名詞既知形＋制限的關係節〕のタイプになってしまう恐れがある。

Diderichsen (1976: 212) は、「制限的關係節は主節にある代名詞 (den, det) によってしばしばその存在が代表されているが、この代名詞は単に關係節に照応しており、それ以外の機能は持っていない」としている。それでは、この「しばしば」とは〔名詞既知形+制限的關係節〕の存在を示唆するののかと言え、そうではないようである。続けて Diderichsen は「そのような代名詞の付かない先行詞を持つ制限的關係節も可能である」と述べ、次のような例文を示しているからである: Vi har Brug for en Kontordame, der er perfekt i engelsk Korrespondance. (我々は商業英語が完璧にできる女性の事務員を必要としている.)。つまり、彼の「しばしば」ではない時とは、指示代名詞ではなく、不定冠詞の付く先行詞などのことを言っているのである。

Afzelius *et al.* (1986: 32) は「指示代名詞は常に關係節で用いられる」としており、〔名詞既知形+制限的關係節〕は言うまでもなく、一般的な〔名詞既知形+非制限的關係節〕にもいっさい触れていない。

Fischer-Hansen & Kledal (1994: 57) には、「關係節の前では、指示代名詞+名詞をしばしば用いる」とあるが、この「しばしば」がどういう意味であるのか、不明である。

4.2. 記述そのものでは〔名詞既知形+制限的關係節〕の存在に言及していないが、例文の中にこのタイプのもが見られる文法書

Koefoed (1989: 173f.) は言う:

Different from Engl. usage, the demonstrative pronoun (adjective) *den*, etc., instead of the definite form⁸⁾ is used with a noun before a restrictive relative or another determinative clause: '*Den herre, (som) vi mødte, er min bror* - The gentleman whom we met [筆者付記: is my brother]; '*den morgen, (da) jeg ankom, var det snevejr*, the morning (when) I arrived it snowed.

しかし Koefoed の挙げる例文の中には、その英訳中のコンマの有無から判断すると〔名詞既知形+制限的關係節〕であろうと思われるものがある。

(12) *Her er drengen, der reddede sin søster fra at drukne* - Here is the boy who saved his sister from being drowned. (Koefoed 1989: 176)

(13) *Damen, der (som) besøgte os i går, og som smilede så venligt* - The lady who came to see us yesterday, and who smiled so kindly. (Koefoed 1989: 176)

Allan *et al.* (1995: 201-208) も先行詞の限定方法に関してはいっさい言及していないが、制限的關係節の例文として、先行詞が〔指示代名詞+名詞〕のものと〔名詞

既知形]のものとの両方を示している。Allan *et al.* の示している制限的關係節の例文の中に次のような〔名詞既知形+制限的關係節〕タイプのものである。

(14) Der ligger hotellet, som jeg boede på. There is the hotel that I stayed in. (Allan *et al.* 1995: 203)

(15) Kjolen, (som) jeg viste dig i går, er for lang. The dress (that) I showed you yesterday is too long. (Allan *et al.* 1995: 203)

(16) Græsset, (som) vi sad på, var endnu vådt. The grass (that) we were sitting on was still wet. (Allan *et al.* 1995: 204)

Lomholt (1982: 69) は、關係節の先行詞が形容詞などに修飾されていない単独の名詞の場合、制限的關係節の先行詞は指示代名詞によって限定され、一方、非制限的關係節の先行詞は後置定冠詞により限定される — すなわち既知形になる、としている。つまり、〔名詞既知形+制限的關係節〕のタイプは存在しないとみなしていると考えてもよいであろう。しかし、Lomholt が示す關係節の例文の中には〔名詞既知形+制限的關係節〕タイプのものである。

(17) lægen til hvem jeg henvendte mig (ou lægen hvem jeg henvendte mig til), le médecin à qui je me suis adressé. (Lomholt 1982: 117)

(17) ではデンマーク語の例文自体にも、フランス語の訳文にも、關係節の前にコンマがない。Lomholt (1982) は制限的關係節の前後では、一貫してそうしているわけではないが、コンマを打たない傾向があることは確実である。また、フランス語では英語などと同じように、制限的關係節の前後にはコンマは打たない。したがって、(17) は明らかに制限的關係節である。

4.3. 制限的關係節として〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕と〔名詞既知形+制限的關係節〕の2つのタイプを認めている文法書

Mikkelsen (1975 (1911): 192) は言う：

既知形あるいは定冠詞〔筆者付記：名詞が形容詞類に修飾されている場合の独立定冠詞のことであろう〕は時折⁹⁾、指示代名詞の代わりに用いられる。これは特に關係従位節の前で起こる。例：Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt (De penge, han dengang fik の代わりに)。〈その時もらったお金は、彼はもう使ってしまった。〉。Den lille dreng, du får så, er min yngste søn. (この den はしばしば弱く発音される。その場合これは定冠詞と解釈するのが最も妥当であろう)。〈あなたが前に見た小さな男子は、私の一番下の息子です。〉。

Aage Hansen (1967: 187) は、ある集合の中から1つのものを他のものに対比させ抽出する場合には、既知形が必要であり、したがって、既知形を用いたり、あるいは

その代わりに指示代名詞等を用いたりするとして、次のような例を挙げている：foråret 1913 <1913年の春>; vi sender vore gode ønsker for julen (= julen i år) og det nye år. <幸多きクリスマス（すなわち、今年のクリスマス）と新年でありますように.>; søndagen gik med havearbejde. <その日曜日は庭仕事で過ぎた.>; syrenen vi plantede i foråret, er gået ud. <我々が春に植えたライラックは枯れてしまった.> - Den juni jeg tænker på <私が考えている6月> - Hvordan går det med den tommeltot du forvekslede med sømmet? <君が釘と勘違いした親指の具合はどうかね?>.

Aage Hansen はまた別の箇所（1967：180）で、限定的な規定語句（determinativ bestemmelse）が付けば既知形が用いられることに言及し、manden i huset <一家の主>; manden jeg mødte <私が会った男> のような例を示している。

上の syrenen vi plantede i foråret と manden jeg mødte はまさに〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の例である。

Stemann & Nissen（1979：191）は言う：

關係従位節の前では（英語，ドイツ語，フランス語等々とは異なり）名詞と結び付いた指示代名詞 den, det 等が用いられる：Den konge, som samlede Danmark, hed Gorm den Gamle. <デンマークを統一した王は，ゴーム老王と呼ばれた.>. I det øjeblik jeg gik, kom han. <私が立ち去った瞬間に，彼が来た.>. … (Kongen, som - とも [言える]).

上記引用の最後の付け足し部分から，Kongen, som samlede Danmark, hed Gorm den Gamle. <デンマークを統一した王は，ゴーム老王と呼ばれた.> という〔名詞既知形 + 制限的關係節〕も可能であることがわかる。

4.4. § 4 のまとめ

以上，§ 4 で見てきたように，明確に〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の存在に言及している文法書は数少ない。明確に〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の存在に言及していなくとも，そのタイプの例文を示している文法書はもとより，明確に〔名詞既知形 + 制限的關係節〕に言及している文法書でも，〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の使用頻度に関して明言しているものはほとんどない。これでは外国人学習者は，§ 2，§ 3 で見たように，〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の使用は周辺的であるという正しい認識が得られず，これを多用する恐れがないとは言えない。（もっとも，Mikkelsen（1975（1911））と Aage Hansen（1967）は記述文法であるから，その性質上，〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の使用に関して，「誤りである」とか「避けたほうがよい」などと述べないのは当然であるが。）本稿で扱った文法書のうち最も古いものである Mikkelsen（1975（1911）：192）ただ1人が，〔指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節〕

の代わりに〔名詞既知形+制限的關係節〕が「時折」用いられることを指摘している、唯一、実態を記述しているものと言える。また、§2で見たように Galberg Jacobsen は〔名詞既知形+制限的關係節〕をこの20~30年間に起こったとされる様々な変化を扱った論文の中で論じているが、Mikkelsen のこの記述から、今世紀初頭にはすでに記録された用法であることがわかる。

5. 〔名詞既知形+制限的關係節〕の使用の要因は何か？

〔名詞既知形+制限的關係節〕の使用の頻度が高まっている要因が英語の影響にあるという Pedersen の考えは、§2で見たように Galberg Jacobsen によってその可能性はあるものの、それがすべての要因ではないであろうとされた。では、その他に要因があるとすると、それは何であろうか。§3で言及した例文はわずか16例しかないが、それでも何らかの傾向が見られるかもしれない。

5.1. 状況から慣用的に用いる名詞の既知形との kontamination “混成”

§3で言及した例文のうちのいくつかでは、關係節を省略しても、先行詞の既知形そのものは不自然ではなく、文が成立する。(例文の番号に関して：Nは任意の番号を表すものとする、(N)は〔名詞既知形+制限的關係節〕を含む例文を意味する。また、(NX)は〔關係節を伴わない名詞既知形〕を、(NY)は〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕を、(NZ)は〔名詞既知形+非制限的關係節〕を含む例文をそれぞれ意味する。例文中の下線は本稿筆者による。)

(18) Leif Jørgensen ser ud på landskabet, han kører forbi. (PS: 13)

〈Leif Jørgensen は(列車で自分が)通り過ぎる外の景色を見ている。〉

(18X) Leif Jørgensen ser ud på landskabet.

〈Leif Jørgensen は外の景色を見ている。〉

ちなみに、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含むのは(18Y)である。

(18Y) Leif Jørgensen ser ud på det landskab, han kører forbi.

〈Leif Jørgensen は(列車で自分が)通り過ぎる外の景色を見ている。〉

(18)は關係代名詞 som が省略されていることから、明らかに制限的關係節を含む例であるが、これから關係節を取り去っても(18X)という文が可能である。この關係は一見、非制限的關係節を思い起こさせるが、事情はまったく異なっている。つまり、(18X)の landskabet の既知形は状況から慣用的に用いる、いわば“状況照応的既知形”であり、前方照応的あるいは外部照応的であるが、(18)の先行詞の既知形は前方照応的あるいは外部照応的の既知形ではなく、後方照応的の既知形である。すなわち、(18)は単に(18X)に關係節を付け足したものではないのである。この点、非制限的關係節の場合は様子が異なる。

(19Z) Hun har fået et billede af Mads Stage i fødselsdagsgave. Hver gang hun sidder på sofaen, kigger hun betaget på billedet, som hun selv havde ønsket sig. (非制限的關係節)

〈彼女は誕生日の贈り物に Mads Stage の絵をもらった。ソファーに座るたびに、彼女はその絵をうっとり眺める。その絵は彼女自身が望んだのだから。〉

(19X) Hun har fået et billede af Mads Stage i fødselsdagsgave. Hver gang hun sidder på sofaen, kigger hun betaget på billedet.

〈彼女は誕生日の贈り物に Mads Stage の絵をもらった。ソファーに座るたびに、彼女はその絵をうっとり眺める。〉

(19Z) から非制限的關係節を省略して (19X) のようにしても、billedet という先行詞の既知形と (19X) の billedet の既知形は両者とも前方照応的であるから、(19X) は後置定冠詞 (すなわち既知形語尾) の機能的変更なしに成立し、(18)、(18X) の landskabet の場合とは事情が異なっているのである。

(18X) と (18Y) は、landskab が文脈の前方にない場合という共通した状況下で用いることができるという意味で、一種の類似性がある。つまり、(18) の關係節の先行詞 landskabet は、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (18Y) の det landskab と (18X) の landskabet との kontamination “混成” からできていると言えるかもしれない。

(11) Tidligt hver morgen kommer avisen, som han abonnerer på. (LD: 59)

〈毎朝早くに、彼が購読している新聞が来ます。〉

(11X) Tidligt hver morgen kommer avisen.

〈毎朝早くに新聞が来ます。〉

(11Y) Tidligt hver morgen kommer den avis, som han abonnerer på.

〈毎朝早くに、彼が購読している新聞が来ます。〉

(18) の場合と同様に、(11) はふつうの人の生活状況に関して、その人が自宅にいるときには、テキストの前方に照応できるものがなくても、stuen, køkkenet, fjernsynet, sofaen などと言うのと同じく、“毎朝、新聞がくる”というときに、(11X) のように avisen と言える。つまり、(11) の關係節の先行詞 avisen は、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (11Y) の den avis と (11X) の avisen との kontamination “混成” からできていると言えるかもしれない。¹⁰⁾

(20) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på blomsterne, jeg havde med. (MF2: 13)

〈彼は、私が持っていた花に目の焦点を合わせるのが難しかった。〉

(20X) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på blomsterne.

〈彼は、(その [見舞いの]) 花に目の焦点を合わせるのが難しかった。〉

(20Y) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på de blomster, jeg havde med.

〈彼は、私が持っていた花に目の焦点を合わすのが難しかった。〉

(20) の関係節は関係代名詞 som が省略されていることから制限的關係節であることがわかる。この場合、本来は (20Y) のようになるべきであろう。しかし、この“花”自体は当該テキストでは (20) の文で初めて出てくるものではあるが、テキストの前の箇所にも主人公が花を持ってきている場面もあるし、また概して、病院に花を持っていくことはごくふつうのことである。したがって、まだ話題に上っていない“花”であっても、(20X) のように、状況から blomsterne という名詞の既知形で表すことができる。つまり、(20) の関係節の先行詞 blomsterne は、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (20Y) の de blomster と (20X) の blomsterne との kontamination “混成” からできていると言えるかもしれない。

(21) Endelig har politiet udarbejdet en intern liste over større byfester og markeder landet over, så politiet kan være på pletten, hvor tingene sker. (WA: 11)

〈最後になったが、警察は全国の比較的大きな町祭りや市の内部リスト^{いち}を作成しており、それで物事が起きる現場にちょうどその時にいられるのである。〉

(21X) [...,] så politiet kan være på pletten, når tingene sker.

〈[…,] それで物事が起きるとき、ちょうどその場にいられるのである。〉

(21Y) *[…,] så politiet kan være på den plet, hvor tingene sker.

(* は非文を表す。)

〈[…,] それで物事が起きる現場にいられるのである。〉

(21Ya) [...,] så politiet kan være på det sted, hvor tingene sker.

〈[…,] それで物事が起きる現場にいられるのである。〉

(21) の場合は、(21X) の være på pletten 〈その時、その場に居合わせる〉という慣用表現との kontamination “混成” が考えられる。しかし、(21) は (18)、(11)、(20) とは事情が少々異なる。つまり、(21) では plet を sted 〈場所〉の意味で用いているわけであるが、この plet を用いた (21Y) は文法的には可能な文であるはずなのに、実際には“言えない文”、すなわち“非文”であると言う。したがって、(21) の関係節の先行詞 pletten は、(21Ya) の det sted と (21Y) の * den plet が意味的に混同されたものと、(21X) の pletten との kontamination “混成” からできていると言えるかもしれない。

ちなみに、(21X) では når で始まる副詞句が要求されるであろう。また、kontamination “混成” の結果生じたであろう (21) では、意味の上でも単に (21Y) の“場所”の意味だけではなく、さらに (21X) の“場所+時間”の意味も加わっているように思われる。

(22) Som en af hans juridiske medarbejdere udtrykte det i ugen, der gik: (WA: 1)

〈彼の法律顧問の1人がこの1週間 (= 過ぎ去った週) に言ったように:〉

(22) は *Weekendavisen* の例文であるが、この新聞はその名称が示す通り、週刊新聞である。(22) の場合は、1996年5月24日 - 30日付けであるから、その前の1週間が新聞記事の中心となっていることは明白である。したがって、記事の中で *ugen* に関して何ら説明することなく、いきなり *i ugens løb* のように書くことができる。この *i ugens løb* の既知形の *ugen* が (22) に反映しているのかもしれない。もしこの解釈が無理があるとすれば、(22) は後述の § 5.4 の説明不可能なタイプの例文に分類されることになる。ただ、この解釈が可能かどうかは別にしても、(22) に見られる *ugen(,) der gik* という表現は、Paludan-Müller 氏によると、近年マスメディアの世界では常套的な成句になっているとのことである。

5.2. 後方の前置詞句 (/副詞類) に照応する既知形との kontamination “混成”

(23) På færgerne mellem Sjælland og Fyn står kaptajnen oppe på skibets bro. Han står og ser på en anden slags bro - broen, der skal gøre de to øer, Sjælland og Fyn, landfaste med hinanden. (PS: 25)

〈シェランとフューン間のフェリー上で船長は船橋の上に立っている。彼は別種の橋 — すなわち2つの島、シェランとフューンを陸続きにさせることになる橋 — を眺めている。〉

(23X) Han står og ser på en anden slags bro - broen mellem Sjælland og Fyn. 〈彼は別種の橋 — すなわちシェランとフューン間の橋 — を眺めている。〉

(23Y) Han står og ser på en anden slags bro - den bro, der skal gøre de to øer, Sjælland og Fyn, landfaste med hinanden.

〈彼は別種の橋 — すなわち2つの島、シェランとフューンを陸続きにさせることになる橋 — を眺めている。〉

例文 (23) と同じ出典のテキストの少し後の箇所では *broen mellem Sjælland og Fyn* という表現が見られるが、この *broen* という名詞の既知形を含む表現は、*broen* がテキスト内で初出であっても可能である。というのも、デンマーク語では *broen mellem Sjælland og Fyn* のように名詞を後続の前置詞句 (/副詞類) が限定している場合には、後方照応の機能は名詞の既知形語尾 (すなわち後置定冠詞) が持っているからである (つまり、*den bro mellem Sjælland og Fyn* のような [指示代名詞 + 名詞 + 前置詞句 (/副詞類)] という構造にはならない)。したがって、(23) の関係節の先行詞 *broen* は、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (23Y) の *den bro* と (23X) の *broen* との kontamination “混成” からできていると言えるかもしれない。

(24), (25) も同様に解釈できようか。

(24) Esben går et par skridt hen mod døren, der fører ind til stuehuset. (MF2: 37)

〈Esben は中の母家に続くドアの方に 2, 3 歩あるく。〉

(24X) Esben går et par skridt hen mod døren til stuehuset.

〈Esben は母家に続くドアの方に 2, 3 歩あるく。〉

(24Y) Esben går et par skridt hen mod den dør, der fører ind til stuehuset.

〈Esben は中の母家に続くドアの方に 2, 3 歩あるく。〉

(25) I ugerne, der fulgte efter[,] optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med besøg i Washington, Bangkok, Libanon og Ægypten, Singapore og Rabat, og så endelig i sidste uge England. (WA: 10)

([,] はコンマを打つべきところに本稿筆者が打ったコンマである。)

〈それに続く数週間に, シラク大統領は, ワシントン, バンコク, レバノンとエジプト, シンガポールとラバト, そして最後に先週イギリスを訪問して, 外交活動を推進した。〉

(25X) I ugerne efter optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med [...]

〈その後の数週間に, シラク大統領は [...] 外交活動を推進した。〉

(25Y) I de uger, der fulgte efter, optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med [...]

〈それに続く数週間に, シラク大統領は [...] 外交活動を推進した。〉

(25Y) の de uger が制限的關係節の先行詞としては中心的な構造であり, (25) の ugerne は周辺的なはずであるが, (22) の場合と同様に, Paludan-Müller 氏によると, (i) ugerne(,) der fulgte efter はマスメディアの世界で現在ではほぼ常套的な成句になっているそうである。

5.3. [名詞既知形 + 制限的關係節] 全体が既知項目である場合の既知性, そして周囲にある既知形の名詞からの analogi “類推”

先行詞が“定”である制限的關係節は主に〔指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節〕の構造になるが, この構造は, 主題に用いられる場合, ふつう“未知項目・前提情報”を表し, 例えば次のようになる。

(26Y) Den politimand, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.

(a) 〈道を知っている警官は, 私たちをそこまで案内しようと申し出た。〉

(“道を知っている警官”は未知項目・前提情報)

すなわち, (26Y) の den politimand, som kender vejen は未知項目であり, 前提情

報である。しかし一方、仮にこの警官のほかに2人の警官がいたとして、それら3人の警官全員に言及した後で、もう1度この警官に言及しようとする場合に、他の警官2人と区別して、この警官を“道を知っている警官”として描写しようとする場合が—非常に稀なことではあろうが—考えられる。その場合にも、(26Y)がそのままの形で用いられるであろうが、その場合の(26Y)中の *den politimand, som kender vejen* は、言及が2度目であるから、“既知項目・旧情報”ということになる。

(26Y) *Den politimand, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.*

(b) <道を知っている警官は、私たちをそこまで案内しようと申し出た。>

(“道を知っている警官”は既知項目・旧情報)

つまり、(26Y)は *den politimand, som kender vejen* が (a) の未知項目・前提情報の場合でも、(b) の既知項目・旧情報の場合でも、そのままの形で用いられるということである(ただし、*den politimand, som kender vejen* が既知項目の場合というのは、非常に稀であるということは、今一度強調されるべきであろう)。

そして、(26Y)の(b)の *den politimand, som kender vejen* が既知項目の場合には、既知項目というのはふつう名詞の既知形(あるいは独立定冠詞)と結びついてあるということからの *analogi* “類推”により、(26Y)の(b)の文意に対して(26)のような文を思い浮かべるのかもしれない。¹¹⁾

(26) *Politimanden, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.*

<道を知っている警官は、私たちをそこまで案内しようと申し出た。>

(“道を知っている警官”は既知項目・旧情報)

つまり、(26)は [*den+politimand,+som+kender+vejen*]-en というように、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕全体に(後置)定冠詞が付いたものと解釈することができるであろう。

(27) *Jeg er kriminalkommissær, sagde manden, der havde været der om eftermiddagen.* (MF1: 50)

<私は警部です、とその日の午後にそこに来ていた男は言った。>

(27Y) *Jeg er kriminalkommissær, sagde den mand, der havde været der om eftermiddagen.*

<私は警部です、とその日の午後にそこに来ていた男は言った。>

(27)は、ある日の午後に被疑者宅の外で張り込み捜査をしていた男が、夕方に別の男を伴って戻ってきて、被疑者宅に乗り込んだ場面に出てくる文である。被疑者とやりとりをする警察側は2人いるわけであるから、そのどちらの台詞かを示すためには、(27)の關係節は制限的關係節である必要があろう。その場合は本来は(27Y)のようになるべきであろう。しかし、上で説明したように、[*den+mand,+der+havde+været+der+om+eftermiddagen*]全体が既知項目であるという意識が働いたために *den mand*

が (27) の *manden* に置き換えられたのかもしれない。

また、この短編の初めの頃から登場するこの捜査官は、2度目に言及されて以来ずっと *manden* という表現で語られている。その既知形からの *analogi* “類推”により、(27Y) の *den mand* が *manden* になったと言えるのかもしれない。

(28) *Konen*, som gav ham *ønskerne*, var heller ikke andet end almindelig. (MF3: 49)

〈彼にそれらの望みを与えた女もまた単なるふつうの女であった。〉

(28Y) *Den kone*, som gav ham *ønskerne*, var heller ikke andet end almindelig.

〈彼にそれらの望みを与えた女もまた単なるふつうの女であった。〉

例文 (28) の出てくる短編は *Der var engang en digter, der fik tre ønsker af en gammel kone*. 〈昔々あるところに、ある老女から3つの望みを授かった詩人がいた。〉という文で始まっており、(28) の場面では“詩人に3つの望みを与えた老女”は短編の筆者と読者にとって既知項目となっている。したがって、(28Y) の [*den+kone,+som+gav+ham+ønskerne*] 全体に後置定冠詞を付ける、つまり既知形にするという意識から (28) の *konen* が生じたと言えるかもしれない。

(29) *Jeg forestillede mig kroppen*, der var skjult under det hvide lagen. (MF3: 18)

〈私はその白いシーツの下に隠されている身体を思い浮かべた。〉

(29Y) *Jeg forestillede mig den krop*, der var skjult under det hvide lagen.

〈私はその白いシーツの下に隠されている身体を思い浮かべた。〉

(29) は、主人公が自分の亡き母の遺体を目の前にしている場面に出てくる例文であるが、これよりも前の箇所ですでに *Kroppen var dækket af endnu et stykke hvidt lagenlærred*. 〈身体はもう1枚の白いシーツ地で覆われていた。〉 (MF3: 17) という描写がある。そうすると、(29) の *kroppen* は前方照応の既知形であると言えそうであり、関係節は必然的に記述的な非制限的關係節ということになりそうであるが、上で見たように、身体が「白いシーツ地で覆われている」ことはすでに述べているわけであるから、(29) で *kroppen* を改めて説明する必要はなく、(29) の関係節は非制限的であるとは考えられず、制限的關係節と解釈される。この場合、[*den+krop,+der+var+skjult+under+det+hvide+lagen*] は既知項目であるので、¹²⁾ これ全体に後置定冠詞を付ける、つまり既知形にするという意識から (29) の *kroppen* が生じたと言えるかもしれない。

また、母親の遺体の描写においては、身体各部分は当然のことながら既知形で挙げられている：*hovedet*, *skuldrene* (MF3: 17); *munden*, *overlæben*, *huden*, *håret*, *ørerne* (MF3: 18)。この既知形からの *analogi* “類推”により、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (29Y) の先行詞 *den krop* が (29) の *kroppen* になったと言えるのかもしれない。

(30) Den vidunderlige historie om drengen, som ved at studere bøger om dybhavsinsekter fik ideen til at lave sin cykel om til en radiosender, der for første gang fik kontakt med extragalaktiske intelligenser. (MF3 : 51)

〈深海の虫に関する書物を研究することで，自分の自転車を，銀河系外の知能と初めて接触することができる電波発信機に改造するアイデアを得た少年に関する不思議な話。〉

(30Y) Den vidunderlige historie om den dreng, som ved at studere bøger [...] <[...] 書物を研究することで [...] 少年に関する不思議な話。〉

(30) は作品中の主人公である 1 人の詩人が，自分が今までに語ってきた数々の話を思い浮かべ，どういう話があったか，数え挙げている場面に出てくる例文である．この詩人（あるいはこの短編の作者）は，(30) の中の“少年”について読者がすでに了解しているものとして，“例のあの [...] したところの] 少年”ということで，(30Y) の [den+dreng,+som+ved+at+studere+bøger+[...]] 全体に後置定冠詞を付ける，つまり既知形にするという意識から (30) の drengen が生じたと言えるかもしれない．また，詩人が挙げる他の話にも，Den grumme historie om appelsinmordet, om den stakkels slaviske arbejder, hvis kone [...] 〈オレンジ殺人，女房が [...] 〉である哀れなスラヴ人の労働者に関する残酷な話〉の appelsinmordet という名詞の既知形などがあり，例文 (30) の前後には drengen [...] と同様の条件下，すなわち historie om の後に既知形の名詞がある．これらの名詞の既知形からの analogi “類推”により，(30Y) の den dreng が (30) の drengen になったと言えるのかもしれない．

(31) Så er der alt det, man skal købe for overhovedet at kunne fange en eneste fisk, som man kan sælge. Først og fremmest fiskekutteren, så diesel til motoren, så garn, så mad ombord, kaffe, sukker til kaffen, koppen som kaffen skal være i, skeen man skal røre sukkeret rundt i koppen med, opvaskebørsten til at vaske koppen med bagefter [...] (PS : 38)

〈次に，売れる魚を 1 匹でも捕まることができるために買わなくてはならないあらゆるものがある．まず第一に漁船，次にエンジンを動かすためのディーゼルオイル，次に網，次に船上の食べ物，コーヒー，そのコーヒーに入れる砂糖，そのコーヒーを入れるべきカップ，そのカップの中で砂糖をかき混ぜるために必要なスプーン，そのカップを後で洗うための洗い物ブラシ [...] 〉

(31Y) den kop som kaffen skal være i, den ske man skal røre sukkeret rundt i koppen med,

〈そのコーヒーを入れるべきカップ，そのカップの中で砂糖をかき混ぜるため

に必要なスプーン、>

(31) の *skeen man skal ...* の *skeen* と *man* との間に関係代名詞 *som* が省略されていることから、関係節 *man skal ...* は制限的關係節であると断言できるが、その直前の *koppen som kaffen ...* の関係節も同様に制限的關係節であると言えよう。その場合、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含むのは (31Y) ということになるろう。

(31) には可算名詞の場合は、*fiskekutteren* や *opvaskebørsten (til at vaske koppen med bagefter)* という既知形の名詞があるが、この既知形からの *analogi* “類推”により、制限的關係節の先行詞の本来的な構造を含む (31Y) の先行詞 *den kop, den ske* が (31) の *koppen, skeen* になったとは言えないだろうか。

また、船上にはカップは複数個あるであろうが、ここではそれを単数で挙げ、総称的に見ていると、ひょっとして言えないだろうか。¹³⁾ つまり、*[kop+som+kaffen+skal+være+i]* 全体に総称的な後置定冠詞が付いて、*[kop+som+kaffen+skal+være+i]-en* のようになっていると考えられようか。

ところで、Paludan-Müller 氏の直感的感覚によると、〔名詞既知形+制限的關係節〕は、例えば *Manden der ville være skyldig* 『その、有罪になりたかった男』のように、小説の題名、すなわちフィクションの題名として比較的多く見られるそうである。その場合、〔名詞既知形+制限的關係節〕は“神話的”(mytisk) なものを表すと言う。同氏が“神話的”など言うのは、神話の世界は想像の産物であり、架空の世界であるが、人びとにとって既知の世界、すなわち既知項目であるのと同様に、小説の作者は小説の中で — そして冒頭、あるいは題名からすでに — 架空の世界を造り上げており、その世界は作者だけでなく、読者にとっても既知の世界、すなわち既知項目であるふりをするのであり、それゆえに〔名詞既知形+制限的關係節〕が題名によく用いられるのであろう、というのが同氏の分析でもあり、また本学の間瀬英夫教授の分析でもある。そして、これは本節 §3.3 で指摘したような〔名詞既知形+制限的關係節〕全体を既知項目として既知性と結び付けるといふ心理作用に通じるところがあると言えよう。ちなみに、Paludan-Müller 氏によると、小説の題名としては〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕はふつう用いられないそうである。

また、例文 (31) の出典である PS は Niels Lund という作家の書いた教科書であるので、彼の作風が (31) に現れていると見ることもできるであろう、という Paludan-Müller 氏の指摘にも言及しておこう。つまり、PS の当該箇所は小説の題名そのもの、あるいは冒頭ではないが、Lund がそれらの箇所で架空の世界を造り出そうとしていると考えることができるかもしれないのである。

同氏のこの指摘を受けて改めて気付くことであるが、Niels Lund は MF2 に短編を書いており、MF2 にある〔名詞既知形+制限的關係節〕の例 2 つのうちの 1 つ (= 例文 (24)) が Lund のものであり、PS の 6 例を加えると、今回の調査対象全体の 16 例

のうち7例が Lund のものということになる。つまり、Lund において、先行詞が“定”の制限的關係節の総数中に占める〔名詞既知形+制限的關係節〕の数は、MF2の1/3とPSの6/18で、合わせて7/21となり、これは比率にすると33.3%である。また仮に今回の調査対象からLundを外したとすると、先行詞が“定”の制限的關係節の総数中に占める〔名詞既知形+制限的關係節〕の数は16/192から9/171に減る。これは比率にすると、8.3%から5.3%に減ることを意味する。

上で示した Paludan-Müller 氏の指摘によると、小説、フィクションの題名においては〔名詞既知形+制限的關係節〕がふつう用いられ、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕はあまり用いられないようである。この場合には、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕と〔名詞既知形+制限的關係節〕との間には意味的な、あるいはニュアンス的な違いがあるということである。しかし、これはあくまでも小説、フィクションの題名という、特定の場面という範囲にとどまっているようである。この意味的な、あるいはニュアンス的な違いがデンマーク語全体にどの程度見られるのかということについては、本稿では扱わないし、筆者の扱える範囲をはるかに越えた問題である。母語話者による研究を待ちたい。

5.4. 説明困難なタイプの例文

§3で言及した例文のうち、例文(32)だけは、その制限的關係節の先行詞がなぜ既知形になっているのかを説明するのは困難であるように思われる。

(32) Hun ser sin unge krop. Kroppen, der fødte børn. Kroppen, der tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand. (PS: 51)
〈彼女には自分の若いときの身体が見えている。子供たちを産んだ身体。若い男たち、特に後に彼女の夫となる、大工の Svend を惹き付けた身体。〉

(32Y) Hun ser sin unge krop. Den krop, der fødte børn. Den krop, der tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand.
〈彼女には自分の若いときの身体が見えている。子供たちを産んだ身体。若い男たち、特に後に彼女の夫となる、大工の Svend を惹き付けた身体。〉

(32)の關係節が仮に非制限的關係節であるならば、その意味は〈彼女には自分の若いときの身体が見えている。その身体が[見えている]。それは子供たちを産んだのだ。その身体が[見えている]。それは若い男たち、特に後に彼女の夫となる、大工の Svend を惹き付けたのだ。〉というように、何とも不自然な内容になってしまう。この場面で非制限的關係節を用いる必要があるとすれば、それは(32)のような文ではなくて、むしろ次のようになるのが自然であろう: Hun ser sin unge krop, der fødte børn, og som tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand. 〈彼女には自分の若いときの身体が見えている。それは子供たちを産ん

だのだ。そして若い男たち、特に後に彼女の夫となる、大工の Svend を惹き付けたのだ。) したがって、(32) の関係節はやはり制限的關係節であると考えざるを得ないが、では、なぜ先行詞を (32Y) の den krop のようにせず、kroppen とするのか、その理由を説明するのは大変難しい。

5.5. § 5 のまとめ

〔名詞既知形＋制限的關係節〕の使用がアトランダムなものであるならば、頻度が高くてよきものであるにもかかわらず、その使用は、すでに見たように、極めて周辺的な現象である。では、なぜこの周辺的な現象が存在するのであろうか。そこには、〔名詞既知形＋制限的關係節〕の使用を促す何らかの特定の環境があるかもしれないと考えてもおかしくないであろう。この点を踏まえ、また、§ 5.1 から § 5.4 まで見てきたことから、〔名詞既知形＋制限的關係節〕を含む16個の例文 — 例文 (31) と (32) はそれぞれ例文を2つずつ含んでいる — のうち、15個の例文の背景が kontamination “混成”, analogi “類推”あるいは既知項目と結びついた既知性で説明可能であるかもしれないことがわかった。ただし、これはあくまでもわずか16個の例文をもとに導き出した結論でしかなく、「ひょっとしたら～であるかもしれない」といった域にとどまることは言うまでもない。また、〔名詞既知形＋制限的關係節〕は小説、すなわちフィクションの題名で比較的多く見られるという Paludan-Müller 氏の指摘に § 5.3 で言及したが、〔名詞既知形＋制限的關係節〕のその用法は、§ 5.3 で示した“既知項目と結びついた既知性”に起因しているかもしれないという仮説で説明できるものなのか、あるいはまったく別の要因があるのかということについて十分解明されたとは言えない。もっと大規模な調査が今後の課題となろう。

6. 名詞の既知形を先行詞に持つ關係節と“新コンマ法”

名詞の既知形を先行詞に持つ關係節はふつう非制限的關係節であるが、これまで見てきたように、周辺的な現象としての〔名詞既知形＋制限的關係節〕も見られる。従来の“文法的コンマ法”(grammatisk komma)では、英語、ドイツ語、フランス語などとは異なり、制限的關係節でも非制限的關係節でも(文頭や文末以外で、他の句読点を打たない場合には)その前後に必ずコンマを打つことになっている。したがって、〔名詞既知形＋非制限的關係節〕でも〔名詞既知形＋制限的關係節〕でも、關係節の前後には必ずコンマを打つわけである。それゆえ、“文法的コンマ法”を用いたテキストの中で周辺的な現象の〔名詞既知形＋制限的關係節〕の例に行き当たったとしたら、その關係節が制限的であると認識するのはなかなか困難なことである。ところで、今年の秋から導入が予定されている“新コンマ法”(nyt komma)ではこの辺りの事情はどうであるのか、以下で検討してみよう。

6.1. “新コンマ法”の特徴

Galberg Jacobsen (1995 : 8 ; 1996 : 7)によれば、1996年秋に現行の正書法辞典 (RO 86) が改訂され、“新コンマ法” — 以前は“統一コンマ法” (enhedskomma) と呼ばれた — が導入され、“ポーズのコンマ法” (pausekomma) が公式のコンマ法としては消えることになる。同時に、従来“文法的コンマ法”と呼ばれていたものは“伝統的コンマ法” (traditionelt komma) と呼ばれるようになる。つまり、“新コンマ法”と“伝統的コンマ法”の2つが公式なものとされるわけである。ただし、従来は“文法的コンマ法”と“ポーズのコンマ法”という2つのどちらにも優劣をつけていなかったのだが、今回は“伝統的コンマ法”よりも“新コンマ法”の方を薦めるということである。

Galberg Jacobsen が“新コンマ法”の諸規則の要点を手短にまとめているので (1995 : 9 ; 1996 : 10 ; Galberg Jacobsen & Gradenwitz 1993 : 147), それを以下に示す。(例文中の記号 ,/ は、“新コンマ法”の規則のうち、当該項目で問題になっている規則が適用された結果、打たれたコンマを表す。 ヶ は、コンマを打ってはいけないところを示す。)

(a) 完結文と完結文の間にコンマを打つこと。

(a-1) Vinden peb,/ og tordenen rullede.

〈風はビュービュー鳴り、雷はゴロゴロ鳴った。〉

(a-2) Det kan være farligt,/ for når der er pålandsvind, slår bølgerne over molen.

〈危険かもしれない。というのは、海風が吹いていると、波は防波堤を越えるからだ。〉

(b) 列挙の場合に、すなわち元来 og, men, eller がありえたところにコンマを打つこと。

(b-1) Han købte kartofler,/ gulerødder og blomkål.

〈彼はジャガイモ、ニンジン、カリフラワーを買った。〉

(b-2) Jeg skal enten til Paris,/ London eller Berlin.

〈私はパリかロンドンかベルリンへ行きます。〉

(b-3) en lille,/ arrig foxterrier

〈小さくて、すぐに吠え(噛みつく癖のあ)るフォックステリア〉

(しかし: en lille ruhåret foxterrier

〈小さいワイヤヘアード・フォックステリア〉)

(c) 説明的で明示的な付け足しにコンマを打つこと。

(c-1) Nu og da går han helt amok,/ fx i eksamenstiden.

〈ときどき彼はまったく気がふれたようになる。例えば試験期間中などに。〉

(c-2) Han håndterede grejet, herunder vaffeljernet, som om han var uddannet kok.

〈彼は道具 — これにはワッフルの焼き型も入るが — を、まるで訓練を積み、資格を持っているコックであるかのように、扱った。〉

(d) 従位節の後ろには必ずコンマを打つこと。

(d-1) Når svalerne flyver lavt, bliver det regnvejr.

〈燕が低く飛ぶときは雨になる。〉

(d-2) Jeg lagde mærke til at svalerne fløj lavt, og at det allerede småregnede.

〈私は、燕が低く飛んでおり、すでに小雨になっていることに気付いた。〉

(d-3) De beboere som har betalt for meget, får pengene tilbage til den første.

〈多く払い過ぎた住人は [来月の] 1 日にお金を返却されます。〉

注意：ある従位節が別の従位節の最後の文要素になっていることがよくある。そのような場合には、その最後の従位節が終わった段階で初めてコンマを打たねばならない。

(d'-1) Skønt man siger ∇ det bliver regnvejr, tager vi af sted.

〈雨になると言われていますが、我々はお出します。〉

(d'-2) Skønt man siger ∇ det bliver regnvejr ∇ når svalerne flyver så lavt, tager vi af sted.

〈燕がそれほど低く飛ぶときは雨になると言いますが、我々はお出します。〉

(e) 従位節は、どうせならその従位節をカッコの中に入れても（ほとんど）よかったと思う場合にのみ、その従位節の前にコンマを打つこと。

(e-1) Forleden spurgte min makker, der ellers ikke interesserer sig for fugle, om jeg ikke syntes svalerne fløj lavt. (= Forleden spurgte min makker (han interesserer sig ellers ikke for fugle) om jeg ikke syntes svalerne fløj lavt.

〈先日、私の相棒が、ふだんは鳥に関心をもっていないのに、燕が低く飛んでいると思わないかと私に尋ねた。〉

(e-2) Jeg kender tilfældigvis hendes første mand, som bor et sted i provinsen.

〈私は彼女の最初の御主人をたまたま知っています。彼は地方のある所に住んでいますよ。〉

(e-3) Han optrådte roligt, om end han ikke var helt upåvirket af situationens alvor.

〈彼は、その状況の深刻さにまったく影響されていないというわけではないのに、落ち着いて振る舞った。〉

(e-4) Vi skal, / uanset om det regner eller ej, være klar til afgang kl. 4.

〈我々は、雨が降っても降らなくても、4時の出発に準備完了していなければなりません。〉

(f) 挿入的な同格の前後にコンマを打つこと。

(f-1) Den største danske å, / Gudenåen, / løber gennem Silkeborg.

〈デンマーク最大の川、Gudenå は Silkeborg を流れている。〉

(しかし: Den store danske å Gudenåen løber gennem Silkeborg.

〈大きい、デンマークの川(の) Gudenå は Silkeborg を流れている。〉

(f-2) Et par mindre bygninger, / laboratoriet og kontoret, / nedbrændte.

〈二つの比較的小さい建物、すなわち実験室と事務室が燃え落ちた。〉

(g) men の前にはコンマ(あるいは別の句読点)を打つこと。

(g-1) Vi ser ikke fjernsyn, / men læser avis.

〈我々はテレビは見ないが、新聞は読む。〉

(g-2) Hotellet var billigt, / men elendigt.

〈ホテルは安かったが、ひどかった。〉

(g-3) Det er et emne som mange kender til, / men kun få vil tale om.

〈それは、大勢の人が知っているが、わずかの人がしか話したがらない話題だ。〉

“文法的コンマ法”の諸規則(R0 86: 578-589; 新谷 1994: 90-107)と上の“新コンマ法”の諸規則の要点を比較してみればわかるように、従位節に関する項目(e)を除けば、残りの項目は両コンマ法に共通するものである(Galberg Jacobsen 1995: 8; 1996: 11)。つまり、“文法的コンマ法”(=“伝統的コンマ法”)に従えば、従位節の前後にコンマを打つわけであるが、“新コンマ法”に従えば、項目(d)により、従位節の後ろにはコンマを打つものの、従位節の前には、項目(e)により、従位節が挿入的な場合にだけコンマを打つわけである。つまり、“文法的コンマ法”に従うと、項目(d)の例文のうち、いくつかは次のようになる。(、[‡]は“新コンマ法”では打たないが、“文法的コンマ法”では打つコンマを表す。)

(d-2') Jeg lagde mærke til,[‡] at svalerne fløj lavt, og at det allerede småregnede.

(d-3') De beboere,[‡] som har betalt for meget, får pengene tilbage til den første.

(d'-1') Skønt man siger,[‡] det bliver regnvejr, tager vi af sted.

(d'-2') Skønt man siger,[‡] det bliver regnvejr,[‡] når svalerne flyver så lavt, tager vi af sted.

上の項目 (a)～(g) より、全体的にみて、“文法的コンマ法”から“新コンマ法”への移行は比較的容易であろうが、項目 (d) の〔注意〕から従位節がどこで終わるかということの見極めと、項目 (e) から従位節が挿入的かそうでないかの見極めが重要となるが、この2つの見極めはかなり困難なことになりそうに思われる。

6.2. 〔名詞既知形＋関係節〕と“新コンマ法”

筆者は最近（1996年6月に）ある種のテストを、本学の2年生のクラスと3・4年生の一部が出席するクラスで行なった。§6.2 で示した“新コンマ法”の規則の項目 (a)～(g) をクラスで説明した後で、テキストに“新コンマ”を打ってもらおうというものである。テキストは例文 (11) の出てくる LD の第23課からコンマを消し去ったものを用いた。その結果は、§6.1 で述べたように、やはり従位節の終わりの見極めと、従位節が挿入的かそうでないかの見極めが問題になるケースが多い。文分析の手短な再訓練が必要であろう。問題のテキストの冒頭は以下のようである。

Hr. Søndergård læser meget. Det kan man se når man kommer ind i hans arbejdsværelse hvor væggene er dækket af reoler fra gulv til loft. Det meste er faglitteratur som Søndergård har brug for i sit arbejde.¹⁴⁾

この最後の部分 faglitteratur som Søndergård har brug for i sit arbejde の関係節は、制限的關係節であるとする者と非制限的關係節であるとする者の両方がいたが、これは文脈から見ても、また Paludan-Müller 氏の意見でも、制限的關係節である。

また、例文 (11) Tidligt hver morgen kommer avisen som han abonnerer på. の関係節はその先行詞の形からふつつ判断されるのとは違い、制限的關係節である、ということクラスで繰り返し説明していたにもかかわらず、som の前にコンマを打った者が複数いたのは、avisen という形に影響されてのことであろうか。

例文 (11) の場合とは異なり、〔名詞既知形＋関係節〕の関係節が制限的であるか、非制限的であるか、前後関係から判断するのが難しい場合があると思われる。そのような場合を想定してか、Galberg Jacobsen (1996: 25) は非挿入節を扱った箇所の〔注意〕で「関係節が挿入的か非挿入的かを判断するのが困難な場合がある。したがって、関係節の前にコンマを打つべきかどうかは、時として個々の人の判断にゆだねられなければならない」¹⁵⁾ として次の例を示している。

(33) Hun er gift med en nordmand(,/) som er meget rig.

(34) Syrenerne(,/) som vi plantede i foråret, er gået ud.

(,/) の () はコンマの任意性を表しているが、(33), (34) の場合には問題のコンマは打っても打たなくてもどちらでも良いということ、単純に意味しているわけではないであろう。つまり、(33), (34) は、関係節が挿入的か非挿入的かを自分で判

断して下の2つのうちのどちらかにしなければならないと言っているのであろう。

(33-1) Hun er gift med en nordmand som er meget rig.

〈彼女は大金持ちのノルウェー人と結婚している。〉

(非挿入的 = 制限的)

(33-2) Hun er gift med en nordmand, som er meget rig.

〈彼女はノルウェー人と結婚しているが、彼は大金持ちだ。〉

(挿入的 = 非制限的)

(34-1) Syrenerne som vi plantede i foråret, er gået ud.

〈我々が春に植えたライラックは枯れてしまった。〉

(非挿入的 = 制限的)

(34-2) Syrenerne, som vi plantede i foråret, er gået ud.

〈それらのライラックは、我々が春に植えたものだが、枯れてしまった。〉

(挿入的 = 非制限的)

もっとも、よく考えて見ればわかるように、与えられたテキストにコンマを打たなければならないなどということは、学校の特殊な授業の特殊なテストや練習でだけ遭遇する状況であり、現実に関節が文章を書く場合には、個々の文は自分自身が考え、作り出すものであるから、それが制限的關係節を含むか、非制限的關係節を含むかは自分自身に問えばよいことであるので、コンマを打つべきかどうかという判断はそれほど難しくはないであろう。いずれにせよ、Galberg Jacobsen (1996: 25) の「關係節が挿入的か非挿入的かを判断するのが困難な場合がある。」というのは、自分の書いた文にコンマを打つという、ごくふつうの状況ではなくて、他人の書いた文にコンマを打つという、かなり特殊な状況を前提としたコメントであるという点で、妙な話であると言えるかもしれない。

7. 外国人学習者が心得るべきこと

以上見てきたことから、デンマーク語には〔名詞既知形 + 非制限的關係節〕以外に〔名詞既知形 + 制限的關係節〕も確実に存在することが確認できたが、この〔名詞既知形 + 制限的關係節〕はあくまでもデンマーク語としては周縁的現象であり、名詞の既知形は制限的關係節の先行詞の中心的な形、すなわち主流ではないこともわかった。つまり、Dansk Sprognævn の Erik Hansen や Henrik Galberg Jacobsen、さらに本学客員教授の Martin Paludan-Müller 氏が例文 (11) に対して示した反応から考えると、〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の使用は避けるべきであると言えよう。自分自身で〔名詞既知形 + 制限的關係節〕を含む文を書かないかぎり、〔名詞既知形 + 非制限的關係節〕との混同も起こらず、“新コンマ”を打つべきか否か、いっさい悩む必要はないのである。

(1996.9.3)

注

- (1) “不定”の先行詞とは、冠詞が付かない、あるいは不定冠詞 en/et や nogle などでは始まる先行詞のことである（例文 (1), (2), (5), (6) 参照）。一方、“定”の先行詞とは、〔名詞既知形〕, 〔独立定冠詞 + 形容詞 + 名詞〕, 〔指示代名詞 + (形容詞 +) 名詞〕, 〔名詞の所有格 + (形容詞 +) 名詞〕, 〔固有名詞〕などの形をとる先行詞のことである（例文 (3), (4), (7), (8) 参照）。
- (2) 出典明記のない例文は筆者が作成したものであり、それがデンマーク語の文として可能であることを同僚の客員教授 Martin Paludan-Müller 氏に確認したものである。
- (3) 前方照応的先行詞とは、例えば例文 (7) の sygehuset 〈その病院〉のように、文脈の流れから何を指すかすでにわかっているもので、前方照応の限定詞によって限定されているものである。外部照応的先行詞とは、Der går en mand på gaden 〈通りを1人の男が歩いている〉の gaden のように、眼前に見てわかるもの、つまり外部照応の限定詞によって限定されているものが先行詞になったものである。前方照応/外部照応的先行詞には固有名詞などもある。前方照応と外部照応の限定詞は、デンマーク語ではふつう定冠詞（後置定冠詞あるいは独立定冠詞）で表される（例文 (7), (8) 参照）。特殊な場合には指示代名詞（den, denne, den der, denne her など）で表されることがある。
- (4) 後方照応的先行詞とは、それ自体では不完全な情報しか内包していなくて、限定する関係節が後方に来ることを意味している。つまり、先行詞は後方照応の限定詞によって限定されており、デンマーク語では指示代名詞の den/det/de が後方照応の限定詞として用いられる（例文 (3), (4) 参照）。この後方照応の限定詞は、Jeg kom til den slutning, at ... 〈私は…という結論に達した〉といった文中でも見られるが、この文中の slutning も at 節によって限定されているのである。
- (5) Pedersen, Viggo Hjørnager. 1988. “Translation and Linguistic Change as Exemplified in a Number of Translations into Danish within the EEC”, Pedersen, Viggo Hjørnager. *Essays on Translation*, 47-60. 残念ながら筆者自身はこれを目にしていない。
- (6) 先行詞が形容詞類に修飾された名詞である場合には、関係節は従来、以下のよう、制限的關係節と非制限的關係節に分けられている（イエスベルセン 1958: 130）。
 - (a) 'De franske soldater, som var modige, løb frem. (制限的)
〈フランス兵のうち勇敢なものは走り出た。〉

(b) De ¹franske soldater, som var modige, løb frem. (非制限的)

〈そのフランス兵たちは勇敢だったので、走り出た〉

[¹ は第一強勢を示す．コンマは“文法的コンマ”]

すなわち，制限的関係節は強勢のある指示代名詞が先行詞を限定しており，一方，非制限的関係節は強勢のない独立定冠詞が先行詞を限定している．

このように，一般的な制限的関係節とは異なり，定冠詞が先行詞を限定する〔名詞既知形＋制限的関係節〕タイプは，先行詞が形容詞類に修飾された名詞である場合には，〔独立定冠詞＋形容詞類＋名詞＋制限的関係節〕ということになろう．この場合，(b)の文が制限的関係節ということになり，(a)と(b)の両方が制限的関係節になる．

今ここに，De franske soldater, der var modige, løb frem. という文があり，前後関係から，その関係節が制限的ということがわかって，音声によらないテキスト，すなわち文字で見るテキストでは，文頭の de が指示代名詞なのか独立定冠詞なのか判断できない．したがって，〔独立定冠詞＋形容詞類＋名詞＋制限的関係節〕の頻度調査は本稿では行なわない．

(7) 本学の間瀬英夫教授との個人的談話による．

(8) この“instead of the definite form”は，他の箇所における instead of の用例から見て，「既知形(でもよいが，既知形)の代わりに」ではなく「既知形ではなくて」という意味で用いられているものと思われる．他の箇所とは，例えば Koefoed (1989: 153) の名詞の既知形に関する箇所である．

Instead of a definite article as Engl. “the”, Danish has an inflectional ending, added to the noun without hyphen, to express definite form:

この場合の instead of ... が「…ではなくて」という意味であることは明白である．

(9) 既知形あるいは独立定冠詞が指示代名詞の代わりに「時折」用いられるのは，文体上の理由によるのか，あるいは，その他の理由によるのか，Mikkelsen がどう考えているのかは不明である．

(10) LD=Lær dansk はスウェーデン語の教科書 *Lär er svenska* (Hildeman & Hedbäck 1969) がその原本になっており，語学教育上のシステムはほぼそのまま踏襲したそうであるし (Hildeman & Hedbäck 1983 (1970): 5), 各課の話の内容もほとんど原本のままである．(そのため，例えば動詞の学習はまず規則動詞第1類から始めるべきところが，LDでは，規則動詞第2類から始まっており，多少の不都合を感じなくもない．これはスウェーデン語版のはじめの課に出てくる動詞に対応するデンマーク語の動詞がたまたま規則動詞第2類であっ

たからであろう。)そこで例文(11)の *avisen* という形は原本のスウェーデン語が何らかの影響を与えているかも知れないと考えられる。(11)に対応するのは、Hildeman & Hedbäck (1969: 59)では *Tidigt varje morgon kommer den dagliga tidning som han prenumererar på.* である。スウェーデン語版の *den dagliga tidning* では決定詞 (determinativ) の *den* が先行詞を限定しており、関係節は制限的であるとわかる (Nylund-Brodda & Holm 1975: 71f.)。ちなみに、仮にこの関係節が非制限的であるならば、先行詞は *den dagliga tidningen* というように定冠詞 (場合によっては指示代名詞) と名詞の既知形により *den ... -en* と二重限定になっているはずである (cf. Jörgensen & Svensson 1986: 115)。スウェーデン語版の〔*den*+形容詞+名詞未知形〕という形式は、表面的に(字面を)見ると、デンマーク語にも同じ形式が存在し、その場合デンマーク語では、*den* は独立定冠詞であるとも、指示代名詞であるとも解釈できる。つまり、スウェーデン語版の *den dagliga tidning* の *den* を、デンマーク語では独立定冠詞になると誤解したならば、デンマーク語の *avisen* という後置定冠詞が付いた形、すなわち既知形が現れても不思議はない。しかしデンマーク語版の編者 Laursen & Budtz-Jørgensen がそのような過ちを犯したとはとても考えられない。そうすると、彼らにとって *avisen, som han ...* の〔名詞既知形+制限的關係節〕は何らかの理由で不自然には感じられなかったということであろう。

- (11) この着想は間瀬英夫教授のものである。また、間瀬教授のこの着想について筆者が Paludan-Müller 氏に報告したところ、同氏はこれに同意を表している。ただし、§5.3の説明方法自体は筆者による。

また、本学の清水育男助教授は、これを別の視点から次のような *analogi* “類推”として説明する。ただし、下の公式化そのものは筆者による。

[未知項目] : [既知項目]

= [不定冠詞+名詞未知形] : [名詞既知形]

= [不定冠詞+名詞未知形+制限的關係節] : X (= [Y+制限的關係節])

X = [名詞既知形+制限的關係節] Y = 名詞既知形

- (12) ちなみに、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕がテキスト中で初出の場合で、主題に用いられるときは、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕はふつう“未知項目・前提情報”を表すということはすでに記したが、それに対し、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕がテキスト中で初出の場合で、— 例えば、(29Y)のような構造の文中で— 主題以外に用いられるときは、ふつう“未知項目・新情報”を表す。つまり、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕は、テキスト中で初出の場合は、主題に用いられるときでも、主題以外に用いられるときで

も，“未知項目”を表すという点では共通している。

- (13) Paludan-Müller 氏によると，(31) では de kopper, som kaffen skal være i
および de skeer man skal røre sukkeret rundt i koppen med というよう
に，de kopper と de skeer とするのが一番ふつうである。場合によっては，
kopperne と skeerne も可能であろう。いずれにせよ，kopper と skeer は複
数形がよい。ちなみに，en kop ... や en ske ... のような〔不定冠詞＋名詞
単数未知形〕... は不可能であると言う。
- (14) この冒頭の部分に“新コンマ”を打つと，次のようになる。(記号 ,/ は“新
コンマ法”によるコンマを表す。一方，∨ は“新コンマ法”ではコンマを打っ
てはいけない箇所を示す。)

Hr. Søndergård læser meget. Det kan man se ∨ når man kommer
ind i hans arbejdsværelse, / hvor væggene er dækket af reoler
fra gulv til loft. Det meste er faglitteratur ∨ som Søndergård
har brug for i sit arbejde.

- (15) NB: Det kan være vanskeligt at afgøre om en relativsætning er paren-
tetisk eller ikke-paretetisk. Det må derfor undertiden bero på den
enkeltes skøn om der skal sættes komma eller ej foran en relativ-
sætning: (Galberg Jacobsen 1996: 25)

(追記)

本誌本号の編集作業期間中に本稿で言及したデンマーク語の『正書法辞典』の新版
(*Retskrivningsordbogen*, 2. udgave) が出版された。

また，編集作業期間中に Martin Paludan-Müller 氏の前任の客員教授 Nina Møller
Andersen 氏の訪日を得た。彼女は現在，コペンハーゲン大学で外国人のためのデン
マーク語や，デンマーク語学・文学を専攻する修士課程レベル (overbygning) の学生
にデンマーク語を教えている。彼女は今現在，上記のデンマーク人の学生に“新コン
マ法”を教えているが，彼女の言うところでは，関係節が挿入的，すなわち非制限的
である場合には，関係節の前後にコンマを置くということに関しては，学生たちが
[他人の書いた] 関係節をそれが制限的か非制限的かを見極めることは非常に困難だ
そうである。したがって，関係節が制限的か非制限的かを見極めることは，日本人の
デンマーク語学習者にはそれ以上に困難であるといえよう (§ 6.2 参照)。

Om bestemmende relativsætninger med et substantiv
i bekendthedsform som korrelat i dansk

Toshihiro Shintani

Resumé

I denne artikel har jeg først og fremmest givet afkald på den nye inddelingsmodel af relativsætningerne i dansk som jeg i *IDUN VIII* viste på grundlag af Nakajima (1980: 25ff.). Der klassificerede jeg nemlig bl. a. typen *Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt.* som en nødvendig relativsætning: bestemmende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat, og hele systemet så ud som følger:

(a) nødvendig relativsætning

(i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat

(ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat

(iii) bestemmende relativsætning med kataforisk korrelat

(b) tilføjende relativsætning

(1) indskudt relativsætning

(i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat

(ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat

(2) fortsættende relativsætning

(i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat

(ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat

Denne min opgaven har sin begyndelse i at Henrik Galberg Jacobsen, seniorforsker i Dansk Sprognævn, under sit korte ophold i Japan efteråret 1993 omtalte min pågældende artikel i *IDUN VIII* og afviste den nye inddelingsmodel af relativsætningerne, og at jeg efterhånden stødte på flere og flere tilfælde hvor jeg simpelthen ikke kunne gøre andet end at erkende at den pågældende relativsætning var bestemmende skønt den havde et substantiv i bekendthedsform som korrelat. Nu er jeg altså vendt tilbage til den traditionelle inddelingsmodel.

Til at begynde med samlede jeg selv på eksempler på [substantiv i bekendthedsform + bestemmende relativsætning] (forkortes som [Subst-EN+ Bst-relat]), og det blev til i alt 16 eksempelsætninger ud af 192 bestemmende

relativsætninger med bestemt korrelat. Herudfra kan brugen af {Subst-EN+ Bst-relat} siges at være et periferisk fænomen i dansk, hvilket stemmer med hvad man kan forstå af Galberg Jacobsen (1996: 25).

Dernæst kiggede jeg på behandlinger af {Subst-EN+ Bst-relat} i flere danske grammatikbøger for udlændinge og nogle deskriptive grammatikker og fandt ud af at kun Mikkelsen (1975 (1911)) og Aage Hansen (1967) samt Stemann & Nissen (1979) gør opmærksom på eksistensen af {Subst-EN+ Bst-relat}, men ingen af dem siger noget om hyppigheden af {Subst-EN+ Bst-relat}'s brug. På den måde kan udlændinge jo aldrig vide, om de skal bruge {Subst-EN+ Bst-relat} eller {demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning}, når disse altså skal bruges.

De ovennævnte 16 eksempler er jo selvfølgelig ikke nok at udlede nogen som helst definitiv konklusion af, men kan måske give nogle vink til at finde mulige grunde til at bruge {Subst-EN+ Bst-relat}. Jeg kan måske sige at jeg har fundet nogle mulige grunde som (1) kontamination med et substantiv i bekendthedsform der efter omstændighederne uden videre bruges, (2) kontamination med et substantiv i bekendthedsform der viser kataforisk hen til en præpositionsforbindelse (/et adverbial) fremme i sætningen, (3) bekendtheden i det tilfælde hvor hele {Subst-EN+ Bst-relat} er et kendt emne, samt i analogi med et substantiv i bekendthedsform i nærheden.

Allersidst i artiklen kiggede jeg på {substantiv i bekendthedsform + ikke-bestemmende relativsætning} og {Subst-EN+ Bst-relat} i forbindelse med "nyt komma". Når nu man med 100% sikkerhed ved at typen {Subst-EN+ Bst-relat} eksisterer i dansk, kan man så spørge sig selv om det ikke er et problem at afgøre om relativsætningen er bestemmende eller ikke-bestemmende (= beskrivende), med andre ord ikke-parentetisk eller parentetisk. Svaret er sikkert ja. Det indebærer at man også vil kunne få vanskeligt ved at afgøre om man skal sætte et komma eller ej foran en relativsætning i den slags tilfælde, når man i efteråret 1996 får indført "nyt komma", som Dansk Sprog-nævn annoncerer (Galberg Jacobsen 1996: 7). Det må være meget svært for japanere at afgøre om en relativsætning er bestemmende eller beskrivende, og det er det også som det fremgår af en lille undersøgelse jeg foretog hos nogle japanske danskstuderende i mine undervisningstimer engang i juni i år (1996).

Som en afsluttende bemærkning kan jeg råde japanske danskstuderende eller

begyndere fra selv at bruge [Subst-EN+ Bst-relat]. Undgår de at bruge det, slipper de også for at måtte tænke sig ihjel over om de skal sætte et komma foran den slags relativsætning eller ej.

Denne artikel består af følgende sektioner:

1. Indledning.
2. Om der findes den type bestemmende relativsætninger der har et substantiv i bekendthedsform som korrelat.
3. Frekvensen af [Subst-EN+ Bst-relat].
4. Behandlinger af [Subst-EN+ Bst-relat] i diverse grammatikker.
 - 4.1. Grammatikker der ikke nævner forskellen mellem [demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning] og [substantiv i bekendthedsform + ikke-bestemmende relativsætning], endsiges eksistensen af [Subst-EN+ Bst-relat].
 - 4.2. Grammatikker der i selve deres beskrivelser ikke nævner eksistensen af [Subst-EN+ Bst-relat], men som giver nogle eksempelsætninger med [Subst-EN+ Bst-relat].
 - 4.3. Grammatikker der nævner eksistensen af både [demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning] og [Subst-EN+ Bst-relat].
 - 4.4. Afsluttende bemærkning i § 4.
5. Hvad er grundene til brugen af [Subst-EN+ Bst-relat] ?
 - 5.1. Som følge af kontamination med et substantiv i bekendthedsform der efter omstændighederne uden videre bruges.
 - 5.2. Som følge af kontamination med et substantiv i bekendthedsform der viser kataforisk hen til en præpositionsforbindelse (/et adverbial) fremme i sætningen.
 - 5.3. Bekendtheden i det tilfælde hvor hele [Subst-EN+ Bst-relat] er et kendt emne, samt i analogi med et substantiv i bekendthedsform i nærheden.
 - 5.4. Den type eksempelsætninger der er vanskelig at forklare.
 - 5.5. Afsluttende bemærkning i § 5.
6. Relativsætninger der har et substantiv i bekendthedsform som korrelat, og nyt komma.
 - 6.1. Hovedtrækkene af nyt komma.
 - 6.2. [Subst-EN+ relat] og nyt komma.
7. Hvad udlændinge bør vide og huske - afsluttende bemærkning.

Af de ovennævnte sektioner bør, efter min mening, § 5 også refereres nogenlunde udførligt på dansk.

§ 5. Hvad er grundene til brugen af [Subst-EN+ Bst-relat] ?

At "øget frekvens" af [Subst-EN+ Bst-relat] skyldes engelsk indflydelse, er Hjørnager Pedersens forklaring, som Galberg Jacobsen (1994: 17) mener ikke kan "udelukkes, men kan næppe heller siges at være tilstrækkeligt dokumenteret". Hvad kan grundene så være til det? Som nævnt ovenfor (i § 3) har jeg samlet 16 eksempler på [Subst-EN+ Bst-relat]. Skønt beskeden, kunne denne samling måske bidrage til at finde mulige grunde til brugen af [Subst-EN+ Bst-relat].

§ 5.1. Som følge af kontamination med et substantiv i bekendthedsform der efter omstændighederne uden videre bruges.

I nogle af de i § 3 nævnte eksempelsætninger - selv om man udelader deres relativsætning - virker substantivets bekendthedsform, den form som det oprindelige korrelat har haft, ikke unaturlig, og den resterende del kan være en hel (hel)sætning. (Understregning i eksempelsætningerne ved mig selv. Kommaerne i eksempelsætningerne er sat efter den grammatiske kommatering. Numrene på eksemplerne skal læses som følger: N står for ethvert nummer. (N): et eksempel på [Subst-EN+ Bst-relat]. (NX): et eksempel på et substantiv i bekendthedsform uden relativsætning. (NY): et eksempel på [demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning]. (NZ): et eksempel på [et substantiv i bekendthedsform + ikke-bestemmende relativsætning]).

(18) Leif Jørgensen ser ud på landskabet, han kører forbi. (PS: 13)

(18X) Leif Jørgensen ser ud på landskabet.

Dog er det (18Y) der har den "rigtige" form for korrelat for en bestemmende relativsætning.

(18Y) Leif Jørgensen ser ud på det landskab, han kører forbi.

I (18) er der udeladt et relativt pronomen *som*, og derfor kan (18) siges klart at indeholde en bestemmende relativsætning. Hvis nu man fjerner relativsætningen fra (18), får man en sætning som (18X), der er helt korrekt. Dette forhold minder umiddelbart om det med ikke-bestemmende relativsætning; dog er det noget helt andet. Bekendthedsformen af *landskabet* i (18X) er nemlig den bekendthedsform der bruges efter omstændighederne, så at sige den

der viser hen til omstændighederne, dvs. anaforisk eller eksoforisk, mens bekendtheden af korrelatet i (18) må være kataforisk. Med andre ord er (18) ikke det man har dannet ved blot at tilføje en relativsætning til (18X). Hvad dette punkt angår, forholder det sig anderledes med en ikke-bestemmende relativsætning.

(19Z) Hun har fået et billede af Mads Stage i fødselsdagsgave. Hver gang hun sidder på sofaen, kigger hun betaget på billedet, som hun selv havde ønsket sig. (ikke-bestemmende relativsætning)

(19X) Hun har fået et billede af Mads Stage i fødselsdagsgave. Hver gang hun sidder på sofaen, kigger hun betaget på billedet.

Udelader man relativsætningen i (19Z), får man (19X), og bekendthedsformen af korrelatet *billedet* i (19Z) og bekendthedsformen af *billedet* i (19X) er begge anaforiske, og netop derfor kan (19X) siges at være en korrekt sætning. Således er forholdet mellem (19Z) og (19X) fuldstændig forskelligt fra det mellem (18) og (18X).

(18) og (18X) har en slags lighed med hinanden i den forstand at ordet *landskab* bruges i samme tilfælde hvor der bagude i konteksten ikke findes noget som ordet viser anaforisk hen til. Derfor kan man måske sige at korrelatet *landskabet* i (18) er blevet dannet som følge af kontamination af *det landskab* i (18Y) der har den "rigtige" form for korrelat for en bestemmende relativsætning, og *landskabet* i (18X).

(11) Tidligt hver morgen kommer avisen, som han abonnerer på. (LD: 59)

(11X) Tidligt hver morgen kommer avisen.

(11Y) Tidligt hver morgen kommer den avis, som han abonnerer på.

På samme måde som ved (18) kan man sige om tilfældet med (11): Som en beskrivelse ved en person i hans/hendes eget hjem kan man bare nævne *stuen*, *køkkenet*, *fjernsynet*, *sofaen* osv. i deres bekendthedsform selv om der i konteksten ikke findes noget disse ord viser anaforisk hen til. På samme måde kan man bruge (11X) uden at man har nævnt *avisen* i forvejen. Derfor kan man måske sige at korrelatet *avisen* i (11) er blevet dannet som følge af kontamination af *den avis* i (11Y) der har den "rigtige" form for korrelat for en bestemmende relativsætning, og *avisen* i (11X).

(20) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på blomsterne, jeg havde med. (MF2: 13)

(20X) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på blomsterne.

(20Y) Han havde svært ved at stille øjnene skarpt på de blomster, jeg havde med.

Relativsætningen i (20) må være bestemmende, fordi der er udeladt et relativt pronomen *som*. Her ville man have ventet (20Y). Selv om det er første gang overhovedet man her hører om de "blomster" der omtales i (20), hører man før i teksten om de andre "blomster" novellens hovedperson har medbragt udefra, og i det hele taget må det være ganske almindeligt at tage nogle "blomster" med på hospitalet (i Danmark). Derfor kan man efter omstændighederne sætte *blomsterne* i bekendthedsform som i (20X) selv om man aldrig har omtalt dem før. Derfor kan man måske sige at korrelatet *blomsterne* i (20) er dannet som følge af kontamination af *de blomster* i (20Y) der har den "rigtige" form som korrelat for en bestemmende relativsætning, og *blomsterne* i (20X).

(21) Endelig har politiet udarbejdet en intern liste over større byfester og markeder landet over, så politiet kan være på pletten, hvor tingene sker. (WA: 11)

(21X) [... ,] så politiet kan være på pletten, når tingene sker.

(21Y) * [... ,] så politiet kan være på den plet, hvor tingene sker.

(21Ya) [... ,] så politiet kan være på det sted, hvor tingene sker.

Ved (21) kan man tænke sig en kontamination med det faste udtryk *være på pletten* i (21X). Det forholder sig dog anderledes med (21) end med (18), (11) og (20): I (21) bruges *plet* i betydningen *sted*, og (21Y) med denne *plet* må grammatisk set være helt korrekt, men siges i virkeligheden at være en "ukorrekt sætning". Derfor kan man måske sige at korrelatet *pletten* i (21) er blevet dannet som følge af kontamination af *det sted* i (21Ya) der har den "rigtige" form for korrelat for en bestemmende relativsætning, via **den plet* i (21Y) og *pletten* i (21X).

(21X) vil kræve en bisætning der begynder med *når* i stedet for *hvor*. Og (21), der kan være opstået som følge af kontamination, synes ikke blot at betyde hvad (21Y) betyder, men også mere end (21Y), forsynet med (21X)'s betydning.

(22) Som en af hans juridiske medarbejdere udtrykte det i ugen, der gik: (WA: 1)

(22) er et eksempel hentet fra *Weekendavisen*. Denne avis er, som navnet antyder, en ugentlig avis. (22) er fra 24. maj 1996, og det meste drejer sig selvfølgelig om ugen før. Uden at forklare hvad *ugen* står for, kan man

uden videre begynde at bruge fx udtrykket *i ugens løb* i avisartiklerne. Denne bekendthedsform *ugen* i *i ugens løb* kan have genspejlet sig i (22), kan man måske sige. Er denne fortolkning ikke mulig, hører (22) måske ind under den type eksempelsætninger der er svær at forklare, som behandles i § 5.4. Ligegyldigt om denne fortolkning er mulig eller ej, kan man blot nævne følgende: Ifølge Martin Paludan-Müller, vores gæsteprofessor (afdeling for dansk og svensk ved Osaka Gaikokugo Daigaku (= Osaka University of Foreign Studies)), er udtrykket *ugen(.) der gik* i de senere år blevet noget af et fast udtryk i medieverdenen.

§ 5.2. Som følge af kontamination med et substantiv i bekendthedsform der viser kataforisk hen til en præpositionsforbindelse (/et adverbial) fremme i sætningen.

(23) På færgen mellem Sjælland og Fyn står kaptajnen oppe på skibets bro. Han står og ser på en anden slags bro - broen, der skal gøre de to øer, Sjælland og Fyn, landfaste med hinanden. (PS: 25)

(23X) Han står og ser på en anden slags bro - broen mellem Sjælland og Fyn.

(23Y) Han står og ser på en anden slags bro - den bro, der skal gøre de to øer, Sjælland og Fyn, landfaste med hinanden.

I den samme tekst hvor (23) forekommer, ser man et udtryk som *broen mellem Sjælland og Fyn*. Dette udtryk med et substantiv i bekendthedsform kan bruges selv om *broen* ikke omtales før i teksten, for i dansk er det substantivets bekendthedsform der har den kataforiske funktion, når et substantiv betemmes af en efterfølgende præpositionsforbindelse (eller et adverbial) som *broen* i *broen mellem Sjælland og Fyn*. Derfor kan man måske sige at korrelatet *broen* i (23) er blevet dannet som følge af kontamination af *den bro* i (23Y) der har den "rigtige" form for korrelat for en bestemmende relativsætning, og *broen* i (23X).

Kan (24) og (25) mon fortolkes på samme måde?

(24) Esben går et par skridt hen mod døren, der fører ind til stuehuset. (MF2: 37)

(24X) Esben går et par skridt hen mod døren til stuehuset.

(24Y) Esben går et par skridt hen mod den dør, der fører ind til stuehuset.

(25) I ugerne, der fulgte efter[,] optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med besøg i Washington, Bangkok, Libanon og Ægypten, Singapore og Rabat, og så endelig i sidste uge England. (WA: 10)

(25X) I ugerne efter optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med [...]

(25Y) I de uger, der fulgte efter, optrappede Chirac den udenrigspolitiske aktivitet med [...]

Selv om *de uger* i (25Y) må være den centrale konstruktion som korrelat for en bestemmende relativsætning, og at *ugerne* i (25) må være den periferiske form for korrelat for en bestemmende relativsætning, er udtrykket (*i ugerne*), *der fulgte efter*, ifølge Martin Paludan-Müller - ligesom ved (22) - blevet noget af et fast udtryk i medieverdenen i dag.

§ 5.3. Bekendtheden i det tilfælde hvor hele {Subst-EN+ Bst-relat} er et kendt emne, samt i analogi med et substantiv i bekendthedsform i nærheden.

En bestemmende relativsætning med bestemt korrelat tager normalt form af [demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning], og når denne konstruktion står i forfæltet i en sætning, danner den som regel "et nyt emne" og "sætningens tema", som fx i (26Y)-(a):

(26Y) Den politimand, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.

(a) ([den politimand, som kender vejen]= et nyt emne: et tema)

[den politimand, som kender vejen] i (26Y)-(a) er altså et nyt emne og et tema i sætningen. På den anden side, hvis der er to andre politimænd end denne til stede, og hvis man vil nævne denne for anden gang efter én gang at have nævnt dem alle tre, kan der tænkes - selv om det ville være yderst sjældent - et tilfælde hvor man vil nævne denne ved at bruge udtrykket "den politimand, som kender vejen" for at skelne denne fra de to andre politimænd. I så fald ville man bruge (26Y) i dens uændrede udseende, hvoraf [den politimand, som kender vejen] dog forekommer for anden gang og derfor ville være et kendt emne og en gammel information ((26Y)-(b)).

(26Y) Den politimand, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.

(b) ([den politimand, som kender vejen]= et kendt emne: en gammel information)

Det vil sige at (26Y) bruges udifferentieret hvad enten [den politimand, som kender vejen] er et nyt eller et kendt emne.

(26) Politimanden, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.

Men når det drejer sig om en sætning som (26Y)-(b), kan man måske sige at man, i analogi med det forhold at et kendt emne som regel er knyttet til

substantivets bekendthedsform (eller selvstændige bestemte artikler *den/det/de*), genererer en sætning som (26) i stedet for (26Y)-(b). (Her skal det nævnes at ideen til denne fortolkning stammer fra professor Hideo Mase på vores afdeling, og at ideen er blevet bekræftet af gæsteprofessor Martin Paludan-Müller. Her vil jeg også nævne at lektor Ikuo Shimizu på vores afdeling ser analogien fra en anden synsvinkel:

[nyt emne] : [kendt emne]

= [(ubestemt artikel +) substantiv uden bekendthedsendelse] :
[substantiv i bekendthedsform]

= [(ubestemt artikel +) substantiv uden bekendthedsendelse + bestem-
mende relativsætning] : X (= [Y + bestemmende relativsætning])

X = [substantiv i bekendthedsform + bestemmende relativsætning]

Y = substantiv i bekendthedsform

Det vil sige *politimanden, som kender vejen* i (26) kan fortolkes som følge af at hele [demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning] har fået en bekendthedsendelse som for eksempel [den+politimand,+som+kender+vejen]-en.

(27) Jeg er kriminalkommissær, sagde manden, der havde været der om eftermiddagen. (MF1: 50)

(27Y) Jeg er kriminalkommissær, sagde den mand, der havde været der om eftermiddagen.

Ved (27) vil man gerne vide hvem af de to personer fra politiet det drejer sig om, så relativsætningen i (27) må være bestemmende. Her vil man normalt forestille sig en sætning som (27Y). Men ligesom ved (26) kan man måske sige at man, påvirket af den fornemmelse at *den mand, der havde været der om eftermiddagen* er et kendt emne, har udskiftet *den mand* med *manden* i (27).

I øvrigt omtales denne kriminalkommissær, som optræder flere gange fra novellens ret tidlige forløb, altid (fra anden gang) som *manden*. I analogi med netop denne bekendthedsform kan man måske også sige at *den mand* i (27Y) er blevet udskiftet med *manden*.

(28) Konen, som gav ham ønskerne, var heller ikke andet end almindelig. (MF3: 49)

(28Y) Den kone, som gav ham ønskerne, var heller ikke andet end almindelig. Den novelle hvorfra (28) stammer, begynder med følgende sætning: *Der var engang en digter, der fik tre ønsker af en gammel kone*. Hvor man møder

(28) ret nær ved novellens begyndelse, er *den gamle kone, der gav digteren de tre ønsker* allerede et kendt emne for novellens forfatter og læsere. Derfor kan man måske sige at *konen* i (28) er opstået ud fra den (under)bevidsthed at man skal tilføje en efterstillet bestemt artikel til hele [den+kone,+som+gav+ham+ønskerne], dvs. stille det i bekendthedsform.

(29) Jeg forestillede mig kroppen, der var skjult under det hvide lagen. (MF3: 18)

(29Y) Jeg forestillede mig den krop, der var skjult under det hvide lagen. (29) stammer fra den scene i en novelle hvor hovedpersonen står foran sin mors lig. Før denne passage er man allerede stødt på en beskrivelse som *Kroppen var dækket af endnu et stykke hvidt lagenlærred* (MF3:17). Herudfra venter man at kunne sige at *kroppen* i (29) er anaforisk, og at relativsætningen i (29) dermed naturligvis er ikke-bestemmende. Men som ovenfor nævnt er det jo allerede beskrevet at kroppen "*var dækket af*" "*et stykke hvidt lagenlærred*", og derfor behøver man slet ikke at forklare "kroppen" på ny; følgelig tolkes relativsætningen i (29) ikke som ikke-bestemmende, men som bestemmende. Her er [den+krop,+der+var+skjult+under+det+hvide+lagen] et kendt emne, og ud fra den (under)bevidsthed at man skal tilføje en efterstillet bestemt artikel til hele [den+krop,+der+var+skjult+under+det+hvide+lagen], dvs. stille det i bekendthedsform, kan man måske sige *kroppen* i (29) er opstået.

Hertil kommer at der ved beskrivelsen af morens lig nævnes kroppens forskellige dele i bekendthedsform, hvilket jo er en selvfølge: *hovedet, skuldrene* (MF3: 17); *munden, overlåben, huden, håret, ørerne* (MF3: 18). I ananlogi med disse bekendthedsformer kan man sige at *den krop* i (29Y) der har den "rigtige" form for korrelat for bestemmende relativsætning, er skiftet ud med *kroppen*.

(30) Den vidunderlige historie om drengen, som ved at studere bøger om dybhavsinsekter fik ideen til at lave sin cykel om til en radiosender, der for første gang fik kontakt med extragalaktiske intelligenser. (MF3: 51)

(30Y) Den vidunderlige historie om den dreng, som ved at studere bøger [...] (30) stammer fra den scene i en novelle hvor en digter som hovedperson opremser de mange historier han hidtil har fortalt i tidens løb. Man kan måske sige at denne digter (eller måske rettere novellens forfatter) lader som om *drengen* i (30) allerede er læserne bekendt, og har formet *drengen* i (30)

ud fra den (under)bevidsthed at skulle tilføje en efterstillet bestemt artikel til hele [den+dreng,+som+ved+at+studere+bøger+[...]], dvs. stille det i bekendthedsform. Desuden skal her nævnes at man også i de andre historier forfatteren remser op, støder på substantiver i bekendthedsform som fx *appelsinmordet* i *Den grumme historie om appelsinmordet, om den stakkels slaviske arbejder, hvis kone [...]*. I analogi med denne slags bekendthedsform kan man måske sige at *den dreng* i (30Y) er blevet udskiftet med *drengen* i (30).

(31) Så er der alt det, man skal købe for overhovedet at kunne fange en eneste fisk, som man kan sælge. Først og fremmest fiskekutteren, så diesel til motoren, så garn, så mad ombord, kaffe, sukker til kaffen, koppen som kaffen skal være i, skeen man skal røre sukkeret rundt i koppen med, opvaskebørsten til at vaske koppen med bagefter [...] (PS: 38)

(31Y) den kop som kaffen skal være i, den ske man skal røre sukkeret rundt i koppen med,

Ud fra det faktum at der er udeladt et relativt pronomen *som* mellem *skeen* og *man* i *skeen man skal ...*, kan man konstatere at relativsætningen *man skal ...* er bestemmende, og ligeledes kan *koppen som kaffen ...* lige foran siges at være bestemmende. Her må det være (31Y) der indeholder den "rigtige" form for korrelat for bestemmende relativsætning.

Når det drejer sig om tællelige substantiver i (31), ser man substantiver i bekendthedsform som *fiskekutteren* og *opvaskebørsten [til at vaske ...]*, og kan man mon ikke sige at *den kop*, *den ske* i (31Y) der har den "rigtige" form for korrelat for bestemmende relativsætning, i analogi med denne type bekendthedsform er blevet omformet til *koppen*, *skeen* i (31)?

Og kan man mon ikke sige at selv om der er flere kopper om bord, nævner man genstanden i ental og betragter den derved under ét eller som en generisk størrelse? Kan man altså forestille sig at man har sat en generisk, efterstillet bestemt artikel til hele [kop+som+kaffen+skal+være+i]: [kop+som+kaffen+skal+være+i]-en.

{ Subst-EN+ Bst-relat } ses for resten ifølge Martin Paludan-Müllers umiddelbare fornemmelse relativt hyppigt i romaners og novellers, dvs. fiktioners titler som fx *Manden der ville være skyldig*. Her siges { Subst-EN+ Bst-relat } at udtrykke noget "mytisk". Når Paludan-Müller siger "mytisk", mener han at den mytiske verden er et produkt af fantasien og dermed en opdigtet

verden, men at den er eller fingeres alle mennesker bekendt. Romanens eller novellens forfatter skaber i sit værk - endda allerede fra titlen eller begyndelsen - en fantasiverden og lader som om denne verden er ikke blot forfatteren, men også læserne bekendt, dvs. et kendt emne for begge parterne. Netop derfor bruges { Subst-EN+ Bst-relat } i titler på romaner og noveller, således analyserer Paludan-Müller. Denne analyse stemmer vel at mærke godt med professor Hideo Mases og lektor Ikuo Shimizus analyser heraf. Og dette kan siges at minde en del om den i begyndelsen af § 3.3 nævnte mentale proces at man betragter hele { Subst-EN+ Bst-relat } som et kendt emne og dermed forbinder det med bekendtheden. I øvrigt bruges { demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning }, ifølge Paludan-Müller, normalt ikke i romaners og novellers titler.

Yderligere kan man nævne at Paludan-Müller påpeger at PS, som (31) stammer fra, er en lærebog af forfatteren Niels Lund, og derfor kan tænkes at afspejle Lunds fiktionsstil. Eksempelsætningerne med { Subst-EN+ Bst-relat } fra PS stammer hverken fra titler eller begyndelser på romaner eller noveller, men man kan altså tænke sig at Lund de pågældende steder prøver at skabe en fantasiverden.

Når man har fået dette påpeget af Paludan-Müller, lægger man på ny mærke til at Niels Lund også har skrevet en novelle i MF2, hvorfra han bidrager med et eksempel på { Subst-EN+ Bst-relat }. Alt i alt bidrager Lund med 7 eksempler på { Subst-EN+ Bst-relat } ud af 21 eksempler på bestemmende relativsætning med bestemt korrelat. Fjerner man Lunds eksempler, når man til følgende tal: 9 ud af 192, hvilket betyder at brugen af { Subst-EN+ Bst-relat } ud af bestemmende relativsætning med bestemt korrelat er på 5,3%, hvis man ser bort fra Lunds eksempler (ellers er det på 8,3%).

Ifølge den ovennævnte påpegning af Paludan-Müller er det { Subst-EN+ Bst-relat } der normalt bruges i romaners og novellers, dvs. fiktioners titler, og her lader { demonstrativt pronomen + substantiv + bestemmende relativsætning } til normalt ikke at blive brugt. Dette indebærer at der i sådan et tilfælde er en eller anden betydnings- eller nuanceforskel mellem disse to konstruktioner. Men det synes kun at gælde så et lille område som romaners og novellers titler. Hvorvidt denne betydnings- eller nuanceforskel kan observeres i hele det danske sprog, behandles ikke i denne artikel, og ligger også langt ud over hvad jeg formår at behandle. Jeg venter at en eller anden dansktalende forsker vil klare opgaven.

§ 5.4. Den type eksempelsætninger der er vanskelig at forklare.

Blandt de i § 3 nævnte eksempelsætninger lader (32) til at være den eneste hvor man ikke kan forklare at dens relativsætningers korrelater er substantiver i bekendthedsform.

(32) Hun ser sin unge krop. Kroppen, der fødte børn. Kroppen, der tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand. (PS: 51)

(32Y) Hun ser sin unge krop. Den krop, der fødte børn. Den krop, der tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand.

Hvis relativsætningerne i (32) var ikke-bestemmende, så ville (32) virke meget unaturlige - de skulle nemlig have lydt noget i retning af: *Hun ser sin unge krop, der fødte børn, og som tiltrak de unge mænd, og navnlig Svend, snedkeren, hendes senere mand.* (ikke-bestemmende relativsætning). Derfor er det mest nærliggende at betragte relativsætningen i (32) som en bestemmende relativsætning. Men at man så har udskiftet *den krop* i (32Y) med *kroppen* i (32), er meget svært at forklare.

§ 5.5. Afsluttende bemærkning i § 5.

Hvis {Subst-EN+Bst-relat} bruges hvor som helst, overalt i sproget, vil man vente en højere hyppighed af denne konstruktion, men det er ikke tilfældet. Den er, som vi allerede har set, et meget periferisk fænomen. Men hvor den bruges, kan det ikke være mærkeligt at ville tro at der må være et eller andet - element eller miljø - der fremkalder brugen af {Subst-EN+Bst-relat}. Fra § 5.1 - § 5.4 kan brugen af {Subst-EN+Bst-relat} forklares som kontamination og/eller analogi og/eller bekendtheden knyttet til kendte emner. Det må siges at være intet andet end hypoteser. Der bør foretages en langt større undersøgelse af dette emne.

Jeg vil slutte (denne sektion af) denne artikel med at minde om at vi ikke har fået opklaret grunden til den af Paludan-Müller påpegede brug af {Subst-EN+Bst-relat} i romaners og novellers, i det hele taget fiktioners titler.

参 考 文 献

(外国語文献の発行地は特記がないかぎり København)

- Afzelius, Otto, Carsten Kjær Andersen, Mogens Fredberg, Bodil Hendrichsen, Steen A. Jørgensen, Karen Tranum & Lissa Winther-Rasmussen. 1986. *Dansk grammatik for udlændinge*. Special-pædagogisk Forlag (tidligere udgaver Dansk Flygtningehjælps sprogskole).
- Allan, Robin, Philip Holmes & Tom Lundskær-Nielsen. 1995. *Danish. A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Diderichsen, Paul. 1976. *Elementær dansk Grammatik*. 3. Udg. Gyldendal.
- . 1982 (1964). *Essentials of Danish Grammar*. Akademisk Forlag.
- Fischer-Hansen, Barbara & Ann Kledal. 1994. *Grammatikken - håndbog i dansk grammatik for udlændinge*. Special-pædagogisk Forlag.
- Galberg Jacobsen, Henrik. 1994. "Sprogændringer og sprogvurdering. Om nogle aktuelle engelskinspirerede ændringer i dansk og om vurdering af dem", *Danske Studier 1994*, 5-28. C. A. Reitzels Forlag.
- . 1995. "Nye kommaregler i 1996", *Nyt fra Sprognævnet*, 1995/3, 8-9.
- . 1996. *Sæt nyt komma. Regler, grammatik, genveje og øvelser*. (Dansk Sprognævns skrifter 25.) Dansk lærerforeningen & Dansk Sprognævn.
- Galberg Jacobsen, Henrik & Mogens Gradenwitz (red.). 1993. *Komma - hvorndr og hvorfor? En debatbog om kommatering*. (= Dansk Sprognævns skrifter 20.) Dansk Sprognævn. I kommission hos Dansk lærerforeningen.
- Gjesing, Kirsten. 1991. *Grammatik - ABC. Dansk grammatik for fremmedsprogede*. Liberalt Oplysnings Forbund.
- Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk II*. Grafisk Forlag.
- Hildeman, Nils-Gustav & Ann-Mari Hedbäck (utg.). 1973 (1968). *Lär er svenska*. Stockholm: Almqvist & Wiksell/Gebbers Förlag.
- イエスベルセン, O. 著・半田一郎訳. 1958. 『文法の原理』. 東京: 岩波書店. (原書は Jespersen, Otto. 1924. *Philosophy of Grammar*.)
- Jones, W. Glyn & Kirsten Gade. 1985 (1981). *Danish. A Grammar*. 2. opl. Gyldendal.
- Jørgensen, Nils & Jan Svensson. 1986. *Nusvensk grammatik*. Malmö: Liber.
- Koefoed, H. A. 1989 (1958). *Danish*. (Teach Yourself Books.) Twenty-second impression. London: Hodder and Stoughton.
- Lomholt, Jørgen. 1982. *Le Danois Contemporain*. Akademisk Forlag.
- Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk ordføjningslære*. Hans Reitzels Forlag.

- 中島文雄. 1980. 『英語の構造』(上). 東京: 岩波書店. (= Nakajima, Fumio. 1980. *Eigo no koozoo* (= *Det engelske sprogs struktur*). Bd. 1. Tokyo: Iwanamishoten).
- Nylund-Brodde, Elizabeth & Britta Holm (red.). 1975. *deskriptiv svensk grammatik*. 4:e tryckningen. Stockholm: Språkförlaget Skriptor.
- Planck, Christian. 1982. *Dansk grammatik med øvelser*. Jørgen Paludans Forlag.
- RO 86 = Dansk Sprognævn. 1988 (1986). *Retskrivningsordbogen*. 5. oplag. I kommission hos Gyldendal.
- 新谷俊裕. 1988. 「デンマーク語の関係節と先行詞の限定方法について」, *IDUN* VIII, 3-32. (= Shintani, Toshihiro. 1988. "Relativsætninger og deres korrelaters bestemmelsesmåder i dansk", *IDUN* VIII, 3-32.)
- . 1994. 「現代デンマーク語の文法的コンマ法」, *IDUN* 11号, 73-114. (= Shintani, Toshihiro. 1994. "Den grammatiske kommatering i moderne dansk", *IDUN* vol. 11, 73-114.)
- Stemann, Ingeborg & Mogens Nissen. 1979. *Moderne dansk for udlændinge. For lidt viderekomne*. 3. udgave. Gyldendal.

例文テキスト

(上記参考文献以外)

- FJ = Planck, Christian. 1989 (1982). *Familien Jensen - og alle os andre. Danske tekster for udlændinge*. 2. udg. 3. opl. Jørgen Paludans Forlag.
- LD = Hildeman, Nils-Gustav & Ann-Mari Hedbäck. 1983 (1970). *Lær dansk - dansk for udlændinge. Tekstbog*. Dansk bearbejdelse: Laursen, Bjarne Bangsgaard & Peter Budtz-Jørgensen. 1. udg. 10. opl. Gjellerup.
- MF1 = Wraa, Ingrid & Niels Dalager (red.). 1987. *Myrens fortællinger 1. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Middelfart: Forlaget Myren.
- MF2 = ———. 1987. *Myrens fortællinger 2. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Middelfart: Forlaget Myren.
- MF3 = ———. 1989. *Myrens fortællinger 3. 7 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Middelfart: Forlaget Myren.
- PS = Lund, Niels. 1994. *På sporet af Danmark, danskere og dansk*. Middelfart: Forlaget Myren.
- WA = *Weekendavisen* 24. - 30. maj 1996. Udlands-udgave, 1-12.
- WA'86 = *Weekendavisen* 26. marts - 3. april 1986.